図書館雑誌
The Library Journal
2026 1 Vol.120 No.1

VOL.120　NO.1　CONTENTS

窓●経験を財産に ―― 小陳左和子　4

こらむ図書館の自由●
知的自由をめぐる韓国図書館界の歩み ―― 千　錫烈　7

●NEWS ―― 5
告知板 … 6／新聞切抜帳 … 8

●新館紹介 ―― 9

新春エッセー●
世界への入口としての読書と冒険 ―― 荻田泰永　10

＊　　＊　　＊

令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会ハイライト

図書館が　彩る未来　伊予路から ―― 松岡　徹　12
第1分科会／公共図書館
社会教育機関としての公共図書館の可能性 ― 小池ひろみ・坂本美有紀　15
第2分科会／大学・短大・高専図書館
研究支援と図書館 ―― 清家芳郎　16
第3分科会／児童・青少年の読書活動支援
読書の力で育む子どもの未来 ―― 川端恵美　17
第4分科会／図書館とデジタル化
図書館とデジタル化 ―― 杉本重雄・植村八潮　18
第5分科会／災害と図書館
災害への備えと対応 ―― 鈴木史穂　19
第6分科会　出版社・書店・図書館
地域をつなぐ，地域とつながる図書館と書店 ―― 成瀬雅人　20
第7分科会／専門図書館・健康情報
愛媛から市民と共に未病・健康・医療を考える ―― 深水浩司　21
第8分科会／インクルーシブな図書館
障壁のないインクルーシブな読書環境の整備に向けて ―― 岡部幸祐　22
第9分科会／障害者サービス
四国から ―― 小原亜実子　23
第10分科会／資料保存
持続可能な資料保存（環境管理） ―― 田﨑淳子　24
第11分科会／図書館の自由
図書館の自由・この一年 ―― 山口真也・鈴木崇文　25
第12分科会／非正規雇用職員
非正規雇用とキャリア形成 ―― 西川啓子　26

●編集委員会
〈委員長〉
松本哲郎（市原市立中央図書館）
〈委員〉
青柳英治（明治大学文学部）
岩永知子（相模原市議会局）
宇野亮一（国立国会図書館）
中村保彦（元文教大学図書館）
長谷川優子（元埼玉県立図書館）
宮原柔太郎（日本体育大学図書館）
米山　薫（多摩市立図書館）
鷲山香織（福井県立図書館）
＊
●事務局スタッフ
秦　秀文・川下美佐子・星川智隆

・今月の表紙
国立国会図書館所蔵
「小供風俗　やり羽子」（部分）
春汀漁史画
〈国立国会図書館デジタルコレクション〉

全国図書館大会に参加して●
第111回全国図書館大会愛媛大会に参加して ―― 宮崎篤子　27
愛いっぱいの全国図書館大会愛媛大会 ―― 豊山希巳江　27
全国図書館大会愛媛大会に参加して ―― 橋本育海　28
愛媛から広がる図書館の未来 ―― 花本若奈　28

＊　＊　＊

報告　非正規雇用職員セミナー（福岡）「見えてきた“現場のリアル”
ー学校図書館と非正規雇用をめぐる課題ー」報告 ―― 山口真也　42

霞が関だより●第266回
子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み
事例について ―― 文部科学省　29
「いごこちのよい　絵本の部屋づくり」 ―― 文部科学省　29

れふぁれんす三題噺●連載その三百二十六／松山市立中央図書館の巻
「知りたい！」に寄り添うレファレンスの現場－豆苗から忍者，そして
三津浜へ ―― 小池ひろみ・河村好恵　32

図書館で実践！SDGs●第13回／鹿角市立花輪図書館
小さな図書館からの持続可能な発信－秋田県SDGsパートナーとして
―― 小林光代　34

小規模図書館奮戦記●その323／上田短期大学附属図書館
新たな図書館づくりに向けて再始動！ ―― 玉岡兼治　37

ウチの図書館お宝紹介！●第255回／千葉大学附属図書館亥鼻分館
亥鼻分館所蔵「古医書コレクション」－江戸時代から明治初期の医学資料
―― 米田奈穂　38

図書館員のおすすめ本●⑩⑨
かずをはぐくむ ―― 内山紗也香　40
人はなぜ物語を求めるのか ―― 笹川美季　40
日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか ―― 渡邊哲哉　41
コスタリカ ―― 大塚敏高　41

図書館員の本棚●
県立図書館長からはじまる図書館探究 ―― 大石　豊　44

＊　＊　＊

●*The Library Journal, January 2026*
Highlight of the 111th All-Japan Library Conference　12–28

●編集手帳 ―― 48
事務局カレンダー　47

＊「協会通信」は休載させていただきました。

謹賀新年

あけましておめでとうございます
本年もよろしくお願いいたします
二〇二六年　日本図書館協会

●図書館雑誌２月号予告 ―― 47

●発行者
公益社団法人日本図書館協会©2026
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電　話（03）3523-0811〈代表〉
直　通（03）3523-0816〈編集部〉
ＦＡＸ（03）3523-0841〈代表〉
〈日図協ホームページURL〉
https://www.jla.or.jp
〈JLAメールマガジン申込先アドレス〉
mailmaga@jla.or.jp

＊本文は中性紙（冷水抽出pH8.1）を使用

経験を財産に

小陳左和子

窓

一九九五年一月、阪神・淡路大震災が発生した朝、火が燃え広がる街や倒壊した高速道路を映したテレビニュースを、当時暮らしていた東京の自宅で出勤前にただただ呆然と見つめることしかできなかった。しかし、連日の報道を食い入るように見ていてもなお、自分自身が大災害に遭うことなど生涯ないだろうと過信していた。

ところが二〇一一年三月の東日本大震災を勤務地の仙台で経験し、その後の一年は図書館の復旧作業に携わることとなった。さらには、二度目の仙台勤務の間にマグニチュード七を超える地震が二年連続で起き、被災するのは人生で一度きりとは限らないのだとも悟った。

また二〇二四年の元日、帰省していた富山で遭遇したのが能登半島地震だった。それまでは立山連峰と富山湾に守られて大きな地震は起きない土地だと思い込んでいたが、この日本ではいつどこで発生しても不思議ではないのだと痛感した。

そういった体験を通して、図書館に携わる者として感じたことを三つ挙げておきたい。

一つめは、被害を完全に防ぐことは困難だが、被害を減じるためにできることはある、ということ。例えば震災の後、書籍落下防止のためにさまざまな対策を施してみたが、大きな揺れに耐えることはなかなか難しい。とはいえ、対策によって利用者が書架から離れる時間を確保したり、落下で壊れる書籍を減らしたりすることはできる。

二つめは、自館の対策は自ら考えるしかないということ。図書館の立地や施設・設備、規模や利用者層、設置母体との関係性など、どこを見渡しても、ひとつとして同じ図書館はない。他館のマニュアルやBCPは大いに参考にできるとしても、結局は自館の状況に応じた検討が不可欠である。

三つめは、災害の経験自体はつらいものではあるが、それを財産に変えていこう、ということ。自身の経験値としてだけでなく、記録に残し伝え継いでいくことで、他の人々や他の地域、そして未来に活かせる財産にしていきたい。

このようなことが今後の減災につながるよう、切に願う。また、これらは災害対策にとどまらず、実はあらゆる図書館活動にも通じることなのではないだろうか。

参考資料
・小陳左和子「そのとき私たちができたこと：東北大学附属図書館が遭遇した東日本大震災」大学図書館研究　二〇一二　九四巻　一―一一頁
https://doi.org/10.20722/jcul.79
・「東北大学附属図書館における福島県沖地震（二〇二二年）対応記録」
https://www.library.tohoku.ac.jp/news/2021/TUL_EQ20220316report1.html

（こじん　さわこ／東北大学附属図書館）

NEWS

令和７年12月に青森県東方沖で発生した地震について（お見舞い）

2025年12月８日夜半に発生した青森県東方沖を震源とする地震により，北海道・東北地方で被害を受けられた皆さまに，心よりお見舞い申し上げます。

一日も早く平穏な生活を取り戻されますようお祈りいたします。

日本図書館協会および図書館災害対策委員会では，被災図書館への支援や情報提供に努めてまいります。被災情報のご提供やお困りごとがございましたら，下記までご連絡いただければ幸いです。

E-mail：saigai@jla.or.jp

図書館災害対策委員会ページ：https://www.jla.or.jp/committees/saigai/

▶2025年度ホーナーフェローシップ・プログラムを実施

2025年10月29日～11月18日，日図協と米国アリゾナ州図書館協会（AzLA）の間で行われているホーナーフェローシップ・プログラムが実施された。本年度はエンブリー・リドル航空大学図書館員のアンドリュー・バーバー氏が来日し，日本の図書館の雇用システムなどを関心テーマとして，国立国会図書館，国立国会図書館国際子ども図書館，オーテピア高知図書館，京都府立図書館，塩

尻市立図書館，多摩市立図書館，椙原町立図書館，板橋区立図書館，京都大学附属図書館，帝京大学図書館，大阪産業労働資料館エル・ライブラリー，京都国際マンガミュージアムなどを訪問した。全国図書館大会愛媛大会にも参加した。

日図協国際交流事業委員会メンバーをはじめ，過年度にホーナーフェローとして訪米した八田裕子氏（オーテピア高知図書館），星野ゆう子氏（日本点字図書館）や，小泉徹氏（元立教大学図書館），佐藤正惠氏（千葉県済生会習志野病院図書室），松野南紗恵氏（東京学芸大学非常勤講師），柳勝文氏（龍谷大学），鎌田均氏（京都ノートルダム女子大学）ほか皆さまに協力いただいた。訪問見学の際に対応いただいた教職員の方々にも，この場を借りて御礼申し上げる。

（三浦太郎（みうらたろう）：JLA国際交流事業委員会委員長）

▶全国公共図書館研究集会（総合／サービス経営部門）（公共図書館部会）開催

2025年12月１日，静岡県静岡市の静岡県コンベンションアーツセンターグランシップを会場に，標記研究集会が静岡県図書館大会と併催として開催された。

全体会では，高橋健二氏（静岡県図書館協会会長，静岡県立中央図書館長）による挨拶の後，優良読書グループ，社会教育功労者，全国公共図書館協議会，静岡県図書館協会表彰が行われた。続く講演会では「公立図書館と新刊書籍市場の曖昧な関係：図書館の蔵書傾向および書店支援」と題して，大場博幸氏（日本大学文理学部教授）から，図書館のベストセラーの複本所蔵に対する批判について，実証データに基づいた分析結果による蔵書傾向が示され，書籍市場に与える影響，国の書店支援の動向について説明があった。

研究集会は，第６分科会として開催され，事例報告「静岡書店大賞：静岡県の読書推進に向けて」（河口雅哉氏：第12回静岡書店大賞事務局長），調査報告「人口減少社会における図書館と地域の関係性とこれからのあり方」，（大谷康晴氏：青山学院大学コミュニティ人間科学部教授），研究協議（河口雅哉氏，大谷康晴氏，高橋健二氏，大場博幸氏（司会・コーディネーター）），情勢報告（植松貞夫氏：日本図書館協会理事長）が行われた。

▶2025年度災害等により被災した図書館等への助成決定

日本図書館協会図書館災害対策委員会は，2025年度の災害等により被災した図書館等への助成の申請について，その審査結果を理事長に報告し，助成を決定した。

９月19日の受付期限までに，福島県，茨城県，埼玉県，石川県，長野県，熊本県，鹿児島県の７県，27機関から申請があった。館種別では，公共図書館８件，大学図書館２件，学校図書館15件，短期大学・高等専門学校１件，専門図書館１件，災害別では令和６年能登半島地震12件，令和６年奥能登豪雨３件，令和７年豪雨等（７月大雨，８月大雨）８件，東日本大震災２件，その他（火災，非災害起因）２件であった。

助成先は次の16機関である。なお，助成総額は図書館災害への指定寄附金等を原資とする278万3000円である。

＜令和６年能登半島地震＞

石川工業高等専門学校図書館，志賀町立富来小学校，穴水町立向洋小学校，輪島市立門前東小学校・輪島市立門前西小学校，志賀町立富来中学校，志賀町立志賀中学校，日本航空

NEWS

高等学校石川
＜令和６年奥能登豪雨＞
輪島市立図書館町野分館，石川県輪島市立町野小学校，輪島市立東陽中学校
＜令和７年豪雨等（７月大雨，８月大雨）＞
霧島市立国分北小学校，八代市立図書館せんちょう分館，寄居町立図書館，箕輪町図書館，霧島市立隼人図書館，霧島市立向花小学校

▶中央教育審議会生涯学習分科会社会教育の在り方に関する特別部会（第12回）開催

第12回社会教育の在り方に関する特別部会が11月６日に開催された。全国公民館連合会から「公民館における社会教育活動の推進方策」の発表，日本博物館協会から「博物館における社会教育活動の振興方策について」の発表が行われた。日本図書館協会からも「生涯学習の施設として地域コミュニティの基盤形成に資する図書館」と題した発表を植松理事長が行っている。

発表の後，「公民館，図書館，博物館等における社会教育活動の推進方策について」の意見交換などが行われた。

中央教育審議会生涯学習分科会社会教育の在り方に関する特別部会（第12回）配布資料（文部科学省）：https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/015/giji_list/mext_00015.html

▶名取市図書館，令和６年能登半島地震「被災地の図書館応援プロジェクト」を始動

名取市図書館は，12月14日より，石狩市民図書館と連携し，令和６年能登半島地震の被災地を支援する特別企画「被災地の図書館応援プロジェクト」を始動すると発表した。震災の記憶と教訓，そして支援の感謝を「恩送り」として未来へつなぐ，図書館ならではの広域連携プロジェクトとして，被災地の図書館や石川県の関連図書を紹介する特設展示，募金活動などが実施される。

令和７年度プレスリリース（名取市）：https://www.city.natori.miyagi.jp/site/houdou/31055.html

▶シャンティ国際ボランティア会，輪島市に新たな移動図書館車を寄贈

公益社団法人シャンティ国際ボランティア会が，輪島市へ新たに制作した移動図書館車を寄贈することになった。令和６年能登半島地震後から軽自動車による移動図書館活動を続けており，2025年11月末までに延べ186回実施，1,475人が利用，2,099冊を貸出している。

新車は金沢美術工芸大学の協力でデザインされ，約1,000冊の本を積載予定。贈呈式は12月16日に開催，車両は１月中に納車され，２月から市内幼稚園・保育所や仮設住宅の集会所などを運行開始予定。

▶文化審議会，登録有形文化財（建造物）として日野市立中央図書館の登録を答申

文化審議会（文化庁）は，2025年11月21日に開催された同審議会文化財分科会の審議・議決を経て，登録有形文化財として指定する建造物の一つとして，日野市立中央図書館（東京都日野市）について文部科学大臣に答申を行った。

日野市立中央図書館は，前川恒雄氏（初代館長）の構想を建築家の鬼頭梓氏が具現化し，現代公共図書館の起点となった建築として評価された。この結果，官報告示を経て，登録有形文化財として登録される予定である。

告知板

●ひと

＜訃報＞

●小田光宏（おだ・みつひろ）**氏**

2025年12月２日逝去。享年68歳。

青山学院大学コミュニティ人間科学部教授，元日本図書館協会理事長。

2019年度より2020年度まで理事長。図書館調査事業委員会・出版委員会委員長，専門性の確立と強化を目指す研修事業検討ワーキンググループ・研修事業委員会委員，図書館情報学教育部会部会長を歴任。中堅職員ステップアップ研修(1)の講師（2000～2002年度），中堅職員ステップアップ研修(2)の講師（2005～2008年度）を務められたほか，JLA図書館情報学テキストシリーズ編集者として，創刊時から携わられるなど，協会の運営・図書館振興活動の活性化に数多くの貢献をされた。

●つどい

■いつも開いている図書館へ－学校司書の配置・処遇の改善を求める院内集会

図書館の非正規雇用改善のための連絡会の３度目の国会院内集会です。

学校図書館法改正後，小中学校に学校司書の配置が進んでいますが，その大半は非正規雇用であり，短時間勤務，複数校兼任など多くの問題があります。

日本図書館協会が2025年９月に出した「学校司書の配置等に関する提言」「学校司書の配置・処遇等について（見解）」を基に学校司書の配置・処遇の改善を広く多くの方に訴えます。

主催：「いつも開いている図書館へ－

NEWS

学校司書の配置・処遇の改善を求める院内集会」実行委員会（参加団体：図書館問題研究会，学校図書館問題研究会，図書館友の会全国連絡会，学校図書館を考える全国連絡会，官製ワーキングプア研究会，公務非正規女性全国ネットワーク，日本図書館協会学校図書館部会・非正規雇用職員に関する委員会）

日時：２月３日（火）13:30-17:00

会場：衆議院第一議員会館

内容：講演「学校司書の役割，その重要性と必要性（仮題）」（野口武悟：専修大学教授），報告「日本図書館協会の『見解』と『提言』」，事例報告「現場で働く非正規雇用の学校司書」（３名）

参加費：無料

※YouTube 配信あり　https://youtube.com/live/Vo71-ofJtpk

■絵本の絵を読むミーティング

絵本の絵に隠された物語や作者の想いを感じ取ることで，参加者が絵本へ理解を深めるとともに絵本の価値を再認識し，子どもの読書活動推進への意欲を高め，自身の今後の活動の糧とする。

日時：３月１日（日）13:00-15:30（開場12:30）

場所：川崎市産業振興会館（川崎市幸区堀川町66-20）

内容：絵本の絵を読むトーク（生田美秋：絵本専門士養成講座講師，神保和子：子どもの本の家ちゅうりっぷ），講演「絵本といっしょに大人になる」（松本春野：絵本作家・画家），ほか

対象：高校生以上（子ども同伴可）

参加費：無料

定員：大人60名（来場30名，オンライン30名）

申込方法：事前申込必要（余裕があれば当日受付有）絵本図書館ネットワークのホームページを参照

問合先：絵本図書館ネットワーク事務局（〒849-2303　佐賀県武雄市山内町三間坂甲13188-40　☎050-3557-9601　FAX.0954-45-3884　E-mail：info@ehon-lib.net）

こらむ 図書館の自由

知的自由をめぐる韓国図書館界の歩み

千　錫烈

韓国は，1910年以降の日本統治時代や1945年以降の南北分断，独裁政権などの経緯から，政府による検閲や禁書といった思想統制が長く続き，図書館界における知的自由（Intellectual Freedom）の議論は低調であった。民主化以降の1997年，韓国図書館協会は「図書館人倫理宣言」を策定したが，「６．＜資料＞図書館人は，知識資源を選択，組織，保存して，自由に利用させる最終責任者として，これを阻害するどのような干渉も排除する」と資料収集提供の自由のみにとどまっていた。2009年の改訂では，「２．図書館人は，図書館サービスを提供するにあたり，自らの偏見を排除し，情報へのアクセスを阻害する一切の検閲に反対する。」と初めて検閲・禁書に対する明確な立場を示し，同時に「図書館知的自由委員会」も設置された。

2020年には，政府の女性家族部（当時）が男女平等や性の多様性に関する図書を含む「私らしさ　子どもの本」リストを公表した際，保守的な政治・宗教団体から「早期の性教育を助長する」との批判が起こり，実際に一部図書館で対象図書が排除された。これを受け，2023年７月に韓国図書館協会は「図書館に対する一切の検閲反対と知的自由を守るための声明」を公表し，外的な圧力は図書館の中立性と国民の知的自由を損なう深刻な挑戦であるとして，すべての検閲や禁書に反対する姿勢を明確にした。さらに2024年８月には，「図書館知的自由ガイドライン」を策定した。１章「背景と必要性」，２章「知的自由と検閲」，３章「侵害への対応案」，４章「今後の課題」の構成からなり，知的自由の考え方と禁書圧力があった際の具体的な対応策を示している。

韓国図書館協会が声明やガイドラインを通じて一貫して知的自由を擁護してきたことは，図書館の存在意義を社会に力強く示すものとなった。一方で，禁書をめぐる問題は，政治的・思想的な圧力，子どもへの悪影響など，韓国内でもさまざまな理由で起こっており，今後も継続的な取り組みが求められる。

（せん　すずれつ：JLA 図書館の自由委員会，関東学院大学）

●その他

日本図書館協会認定司書事業委員会委員を公募いたします

日本図書館協会認定司書事業委員会では委員の公募を実施いたします。

応募資格等詳細は，日本図書館協会 HP の認定司書事業委員会ページをご覧ください。

問合先：E-mail：nintei@jla.or.jp

NEWS

新聞切抜帳

●全国

▶私設デジタル図書館と著作権　法律書めぐり　学者・出版社「侵害」訴え　「２万冊」全文検索　有料会員に必要ページ送付　［国立］国会図書館と同じサービスで適法×大量データ即時に許諾なく営利目的　「出版社，立ちゆかなくなる」［**一般社団法人法律書デジタル図書館**　「法律書デジタル図書館サーチ」］
（読売10/28，関連２紙）

▶〔読書推進月間〕楽しむ習慣子どもに　タイパ重視「読まない」傾向　「５分後に意外な結末」幅広く　本屋に行こう　全国3000店でイベント　漫画家のトークショーも　活字離れもったいない　小説家・タレント　宮田愛萌さん　学校読書調査結果
（読売10/28）

▶**ビルボード**［ジャパン］　本のチャート［「JAPAN Book Hot 100」］　来月６日から　［図書館での］貸出数・［電子書籍］ダウンロード［数］加味
（読売10/30）

▶「本の甲子園」来年開催　47都道府県の小説「対戦」
（山陰中央新報11/3）

▶〔ひもとく〕市民がひらく図書館　京都橘大学教授（図書館情報学）　嶋田学　個が生きる社会をはじめるには　能動的に関わる　人と出会う場を
（朝日11/8）

▶古文書かじる虫［ニュウハクシミ］拡大　外来種19都道府県で確認　［**東京文化財研究所**］　（読売11/10夕）

▶変貌する公立図書館　飲食可［**石川県立図書館**］，幼児の声容認…交流拠点へ　滞在型を目指す［**岐阜市立中央図書館**］　正月三が日も開館［**さいたま市立大宮図書館**］
（山陰中央新報11/15）

●関東

▶茨城［県］・**取手**［市］　図書館勝手に廃止・移転　市民の声生かした駅前整備に　“説明がない　情報開示を”「広報で知った」　市議会で追及
（しんぶん赤旗11/19）

▶**狛江**［市］に新複合施設　［こまえ］みらいテラス　児童図書［コーナー］や学習コーナー　（読売〈多摩〉11/3）

▶**日野**［市立］・**中央図書館**［登録有形］文化財に　文化審［議会］答申　「歳月経るほど美しく」設計
（読売〈多摩〉11/22）

▶歴史つなぐ「戦時文庫」　GHQ没収免れた1570冊　**神奈川**［県立図書館］
（山陰中央新報9/5）

●甲信越・北陸

▶農業の書籍まとめて閲覧　［**甲州市立**］**勝沼図書館**　［データベース］サービス［「ルーラル電子図書館」］県内初導入　農家サポートへ
（山梨日日〈峡東〉10/9）

▶触れて体感　作品楽しむ　彫刻，手作り絵本展示　［**山梨**］**県立図書館**［「2025ふれてみる展覧会」］
（山梨日日10/25）

▶弁当つめて出かけよう！　［**松本**］**市中央図書館**　［食育］関連本コーナー設置　［「松本の旬の食材をお弁当につめてでかけよう」］
（市民タイムス10/7）

▶本の世界　BTS切り口に　**諏訪市図書館**に関連コーナー
（信濃毎日10/9）

▶「推し本」紹介ポップ　人気投票受け付け　**松本市図書館**　小中学生らの90点
（信濃毎日10/9）

●関西

▶「ひょうご本大賞［2025］」ノミネート作品紹介　［**兵庫**］**県立図書館**　投票受け付け中　（神戸〈明石〉10/12）

▶明石藩ゆかりの文化人紹介　関連書籍や地図展示　［**兵庫**］**県立図書館**［明石市立文化博物館と連携］
（神戸〈明石〉10/19）

▶〔戦後80年　解説〕戦時の「常識」映す地図帳　**奈良**［**県立図書情報館**］の「戦争体験文庫」　台湾は「地方」　満州は「国」　寄贈本の魅力　領土表記　軍国の知識　耳からも　寄贈資料読み解き企画展　初年兵から終戦まで回想
（読売11/19）

●中国・四国

▶緑綬褒状　米子市朗読ボランティア**「火曜の会」**（米子市河崎）　言葉で伝える命の尊さ
（山陰中央新報11/2）

▶〔私に何ができるか　戦後80年〕被爆の情景　音楽と共に朗読　［島根県］美郷［町］・梅原［信子］さん　故郷で語り部　広島で活動経験　「悲惨な話，耳傾けやすく」［**大田市立仁摩図書館**　「戦争と平和について」］
（山陰中央新報9/2）

▶**安来市**小中［学］生に電子図書館　2500人対象　400冊タブレットで　市内企業［プロテリアル安来工場］の寄付金で運用　（山陰中央新報10/31）

▶三瓶［山］の伝説親しみやすく　**大田**［**市**］　社会福祉事業団が絵本［『さひめやまのおはなし』寄贈　図書館等に配布］　（山陰中央新報11/21）

▶［『ばけばけ』キャラクター］トキやヘブンそっくり　［細田滋さん　似顔絵展　**雲南市立大東図書館**］
（山陰中央新報11/22）

▶**島根県立図書館**［登録有形文化財］改修へ　老朽化，利用空間狭く
（山陰中央新報11/26，関連１紙）

▶［小泉］八雲とセツの月一資料展　**松江市立中央図書館**　所蔵品を公開
（山陰中央新報11/27）

▶［小泉］八雲広めた桑原羊次郎　**島根大**［**学附属**］**図書館**［**本館**］で企画展　功績を紹介（山陰中央新報11/27）

▶**岡山県立**［**図書館**　個人］貸し出し［2024年度］全国１位　全国の［都道府］県［立］図書館で５年連続
（山陰中央新報10/8）

●九州・沖縄

▶「反戦短歌」入賞決まる　［**筑後市立図書館**］　（読売11/15）

▶〔#LENS〕元温浴施設　いい本だな　［**南関町図書館〈このみ ch-i〉**　2025年10月開館　熊本県］
（読売11/17夕）

今月も石井一郎様，梅野みな様および山梨県立図書館，県立長野図書館，小郡市立図書館，筑後市立図書館の皆様より記事の提供を受けました。ありがとうございました。

新 館 紹 介

■ふじみ野市立上福岡図書館 （埼玉）

開館日 2025年２月１日
延床面積 2,799㎡
設計 株式会社久慈設計
〒356-0017 ふじみ野市上野台3-3-1
☎049-262-3710

▶建物の老朽化のため，大規模改修工事を行いました。靴を脱いでゆっくりできるおはなしのへや，集中できる学習・閲覧席，外の風にあたりながらゆっくり過ごせるくつろぎスポットを新設しました。 （小高美昭）

■明石市立二見図書館 （兵庫）

開館日 2025年４月１日
延床面積 537㎡
設計 吉忠マネキン株式会社
〒674-0095 明石市二見町西二見駅前1-18 イトーヨーカドー明石店３階
☎078-965-9023

▶おしゃべりOKで，子どもと大人が一緒に本を選べて，寛げる。地域の「こんな図書館がほしい」の声を形にしました。図書館に＋αの使い方ができる心地良いリビングのような居場所をめざします。 （助代隆志）

■東広島市立高屋図書館 （広島）

開館日 2025年３月21日

延床面積 207㎡

設計 JR西日本コンサルタンツ

〒739-2125 東広島市高屋町中島450-5

▶JR西高屋駅に併設した複合施設「高屋情報ラウンジあったかや」内に開館。駅の待合室も兼ねたくつろぎやすい空間で，予約本を24時間ロッカーで受け取れるなどICTを活用した便利な施設です。 （深谷真紀子）

新館の情報を募集しています！

日本図書館協会では，新しい図書館の情報を募集しています。公立，私立，大学，短大，専門等，館種は問いません。

①図書館名（施設名）
②所在地（公立図書館の場合は市区町村名までででも結構です）
③電話番号（わかれば）
④開館日（○年○月等）

以上の情報を，おわかりになる範囲で結構ですので，下記までお知らせください（お知らせいただいた方のお名前を館にお伝えすることはありません）。

〒104-0033
東京都中央区新川1-11-14
公益社団法人日本図書館協会 新館紹介係
E-mail：zasshi@jla.or.jp

新春エッセー

世界への入口としての読書と冒険

荻田泰永

北極や南極を歩き始めて，25年になる。

自分の肉体ひとつで，必要な装備を積んだソリを自力で引きながら長距離を踏破する，そんな極地冒険を繰り返してきた。

冒険とは，「危険を冒す」と書くように，危険やリスクを伴う行為である。しかし，極地に限らずあらゆるフィールドで活動する人たちに「危険そのものを目的にしているのか」と尋ねれば，ほとんどの人の答えは否定的だろう。

危険とは，冒険者が目的をもって遂行する行為の過程に，必然的に存在する条件に過ぎない。

長年冒険を続けているにもかかわらず，私は「冒険」という言葉が表す意味に常に懐疑的だった。冒険とはそもそも何なのだろうかと考え続けてきた。

その思考のヒントを与えてくれるのが，読書である。

古今東西の冒険者たちの思考や体験を，時代も言語も越えて伝えてくれる，それが読書の素晴らしさだ。もう会うことの叶わない伝説的な冒険家たちと対話できる。

大切なのは，本を通して著者と「対話」する姿勢だ。

本に書かれたことを丸ごと鵜呑みにするのではなく，自分なりに解釈しながら読み解こうとする姿勢こそが，真に「本を読む」という行為だと思う。

冒険とは何か。

そんな大きな問いにヒントを与えてくれた，忘れられない一節がある。

アメリカのユダヤ系詩人ポール・ツヴァイクの『冒険の文学』の一節だ。

古今東西の冒険文学を渉猟し，冒険の精神の系譜を照らし出そうとした一冊の中に，冒険者の心情を比喩豊かに表現した文章がある。

「冒険者は，自らの人性の中で鳴り響く魔神的な呼びかけに応えて城壁をめぐらした都市から逃げ出すのだが，最後には語ることのできる物語をひっさげて帰ってくる。社会からの彼の脱出は，きわめて社会化作用の強い行為なのである」

この一文に出会った時，それまで心の中にぼんやりとあった「冒険の像」に，はっきりとした輪郭が与えられた。ツヴァイクの言葉を借りることで，自分の概念が具体化された瞬間だった。

冒険者の内側には「魔神的な呼びかけ」がある。

それは決して「天使の囁き」ではない。応えれば不利益を被るかもしれず，命に関わるかもしれない。それでもなお，心の奥から湧き上がる内発的な衝動に従うところから，冒険は始まる。

社会という「城壁の都市」から飛び出し，肉体と知恵で荒野をサバイブする。そして「語ることのできる物語」を携えて社会に帰ることで，初めてその一人称的行為は社会と交わり，価値を帯びるのだ。

私は2021年５月から，神奈川県大和市で「冒険研究所書店」を営んでいる。

おぎた・やすなが

冒険家。神奈川県大和市で独立系書店「冒険研究所書店」を開いている。

約100平米の空間に5,000冊ほどを揃えたセレクト型書店だ。

旅や冒険だけでなく，小説，ノンフィクション，人文，絵本，美術書など幅広いジャンルを置いている。

冒険家の私がなぜ書店を始めたのかとは，よく尋ねられる。その理由の一つに，冒険と読書の共通点としてどちらも「主体的な行為」であるという点がある。

冒険にはルールもマニュアルもない。自ら考え，自分なりの手法やルールをつくる主体性が求められる。

一方で，読書にも主体性が必須だ。

主体性のない読書から考えてみれば，それは本の中に「答え」を探し求める読書である。本に書かれた答えとは著者の答えであり，読者自身の答えなど書かれてはいないのだが，著者が高名で権威的であるほど，そこに答えが書かれていると思い込んでしまう。

しかし，本はいつもヒントしか囁かない。答えまでは語らないのだ。

答えは，読者自身が人生の中で主体的に作り上げていくしかない。読書は，そのための強力な手段だ。

私が書店を始めたのは，冒険と読書という二つの行為を通して，人々の世界を広げる手助けがしたいと思ったからだ。

20代前半で極地冒険に出会い，社会という城壁の外へ放浪した私が，社会に持ち帰った「語ることのできる物語」の一つの形。それが，書店である。

本を読む環境は，未来永劫なくならないだろう。

本を主体的に読み，自らの頭で考え，魔神的な衝動にも応えて何かに挑む姿勢こそが，人間であることだ。

昨今，書店は経営的には割に合わない商売となり，激減している。

だが，街角で偶然出会う一冊の本が，人生を左右してしまうことだってあるだろう。書店を経営していて，忘れられない体験がある。

ある日，店に近所の中学生がやってきた。彼は，目当ての本があったらしく，店に入るなり目的の書棚の前に立ち，一冊の本をレジに持ってきた。

それは，フランスの哲学者ロジェ・カイヨワが書いた『蛸』という本。

中学生が読むには随分と難解な本を選んだことに驚いて「どうしてこの本を？」と尋ねた。

「前に学校で蛸の生態を学んだらすごく不思議で面白くて，興味があったんです。前にここでこの本を見つけて，その時はお金が足りなかったんだけど，今日お小遣いが貯まったので買いに来ました」

彼は笑顔で，本を抱えて帰っていった。

同じ本は，図書館でも借りられたかもしれない。しかし，彼は小遣いを貯めて，買いたかったのだろう。自分のものにしたかったのだろう。

帰宅した彼は，期待を込めて読み始めたところで，内容の難しさから読破できないかもしれない。

しかし，彼はこの本を簡単には手放さないはずだ。本棚に置き続けたいつの日か，再び手に取る日が来るかもしれない。

中学生が一冊の本を選び取った光景を思い返すたび，私は書店という場所の価値について考えさせられる。

好きな本を選んで簡単に買うことのできるネット空間と違って，書店には人間が選んだ本が並ぶ。それは，自分自身が予期しなかった方向から飛んでくる，予想外の出会いである。中学生の彼は，私の書店で『蛸』と出会い，小遣いを貯めてそれを買うという代え難い体験をした。

冒険であれ読書であれ，人が主体的に世界へ向かうためには「入口」が必要だ。一冊の本が誰かの視界をわずかに押し広げる，その可能性を信じている。

本と人が出会うという，体験の場所を守ることは，人が自分の世界を主体的に広げる権利を守ることでもある。

その役割を担う場所が，情報化社会も極まったこれからの社会には，より一層必要とされる，私はそう信じている。

＊　　＊　　＊

［NDC 10：019　BSH：読書］

令和7年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会ハイライト

図書館が　彩る未来　伊予路から

★☆★

松岡　徹

2025年10月30日（木）と31日（金）の２日間，愛媛県松山市において「図書館が　彩る未来　伊予路から」を大会テーマとして，第111回全国図書館大会を開催した。愛媛県では初めての開催になる。全体会と第１～10分科会は対面形式とし，愛媛県県民文化会館，松山市総合コミュニティセンター，愛媛大学，愛光学園，愛媛県男女共同参画センター，愛媛県視聴覚福祉センターを会場に，全国からのべ854名の参加があった。第11・12分科会は録画配信とし，10月20日（月）から12月31日（水）までオンラインで提供した。

【開会式・表彰式・基調報告】

１日目は愛媛県県民文化会館において，開会式・全体会を実施した。開会式の冒頭では，オープニングアトラクションとして，愛媛の代表的な祝福芸能である「伊予万歳」が披露された。続いて，実行委員会委員長である髙岡哲也愛媛県教育委員会教育長による「開会の言葉」，大会会長である中村時広愛媛県知事，副会長植松貞夫日本図書館協会理事長による主催者挨拶並びに同野志克仁松山市長（代理・田淵雄一郎副市長）による歓迎の挨拶があった。また，倉田敬子国立国会図書館館長から図書館の未来を照らす来賓祝辞を賜った。

その後，「第41回日本図書館協会建築賞」を受賞した学習院大学図書館の表彰式があり，また，第15期（2025年度）日本図書館協会認定司書の代表として，指宿市立指宿図書館・下吹越かおる氏，松山市立中央図書館・小池ひろみ氏，名張市立図書館・萩原大介氏に認定証が交付された。

▲愛媛の祝福芸能「伊予万歳」

▲右から認定司書の下吹越氏・小池氏・萩原氏と植松理事長

さらに，植松貞夫日本図書館協会理事長による基調報告があった。文部科学省の有識者会議で検討されている内容や，書店・出版・公立図書館の現状についての報告があり，重要な示唆に富む報告であった。

【記念講演】

記念講演は，愛媛県出身の白川密成氏（四国八十八ヶ所霊場第57番札所栄福寺住職），高橋久美子氏（作家・作詞家），田丸雅智氏（ショートショート作家）を講師に迎え，「読むこと　書くこと　生きるということ」をテーマとして，トークセッションを行った。コーディネーターは，いよ本プロジェクト代表の岡田有利子氏が務めた。町に図書館が無く，近所の集会所にやって来る移動図書館を楽しみにしていたという思い出話から，読書バリアフリーの大切さ，SNS全盛の時代に言葉を練る場所としての図書館の意味が相対的に高まっていること，書くことから始まる読書もあること，図書館がみんなの居場所になってほしいという期待など，多岐にわたり熱量高く，そしてわかりやすい言葉で語っていただき,私もとても興味深く拝聴した。講師それぞれが，自分の経験から気づいたことや大事にしている思いを語り合い，参加者に新たな視点を届けることができたと感じている。私は，読むことや書くことが日々の気づきや喜びを生み，図書館がその中心として日々の暮らしを支えていく未来に期待を寄せたい。

▲左から岡田氏・田丸氏・高橋氏・白川氏と
松岡愛媛県立図書館長

【懇親交流会】

懇親交流会はANAクラウンプラザホテル松山で開催され，約230名の参加があった。

【分科会】第２日　10月31日（金）

２日目の分科会は，松山市総合コミュニティセンターほか四つの会場で行われた。そのうち，第１分科会では「ワクワクする学びと出会えるワクワクする図書館へ　ともに一歩を踏み出そう」と白熱した議論が交わされた。第２分科会では，図書館職員と研究者が互いの想いを共有し，未来に向ける研究支援のあり方について熱く語り合った。関連事業としてポスターセッション「わが図書館のいち“推し”紹介」も開催し，各大学・短大・高専図書館がそれぞれの個性あふれる取り組みを宣伝した。また，第３分科会の会場は，愛光学園の「文化会館」（博物館と学校図書館を融合した施設）であり，見学も可能であった。先進的な学校図書館で開催できたことは特筆すべき点である。

【愛媛大会での試み】

愛媛大会では，愛媛県イメージアップキャラクター「みきゃん」と「こみきゃん」,「ダークみきゃん」を用いたメインビジュアルとロゴマークを作成した。これらを使ったしおりやシール，ポロシャツ，ウインドブレーカーによって，大会の啓発や機運醸成を図った。また，全体会会場ではトートバッグを販売，好評のうちに完売した。

円形のメインビジュアルは「読書→思考→創造→読書」と続いていく学びの循環と，それを支えるために時代の変化とともに途切れなく進化していく図書館の姿を表現している。「第111回」をデザイン化した“111（わん・ワン・ＯＮＥ）”の間に並ぶオレンジ・グリーン・ブラウンの線は，本棚に並ぶさまざまな本を表している。

「みきゃん」と「こみきゃん」,「ダークみきゃん」は，大会テーマである「未来を彩る図書館」の姿を表しており，全体会会場（愛媛県県民文化会館）で，参加者のみなさんをお迎えした。

▲円形のメインビジュアル

▲参加者を迎える「みきゃん」と「こみきゃん」，「ダークみきゃん」（右から）

また，図書館等が実施する，愛媛県内における文字・活字文化に関連する文化・芸術事業及び愛媛県外における愛媛をテーマとした文化・芸術事業を，愛媛大会の関連プログラム事業として認定する「トリプルワン・プロジェクト」を行った。第111回であることにちなみ，実施する関連プログラムの数が111（トリプル・ワン）となることを目指したもので，29都県から64事業の参加があった。川崎市立宮前図書館の「「Discover 愛媛」～愛媛の魅力を本で発見！～」では，2018年から続く東京事務所同士の交流をきっかけとした縁に着目し，愛媛に関する資料や観光パンフレットを展示していただいた。伊万里市立伊万里中学校の図書館では，愛媛県を舞台にした小説や物語を集め，作品に登場する地名や風景を掲載した「愛媛マップ」とあわせて，読書と共に愛媛の地理も学べる展示をしていただいた。参加事業は愛媛大会公式サイト（https://www.pref.ehime.jp/site/111th-library-ehime/88195.html）で紹介しているのでご参照いただきたい。本プロジェクトを通じて，各地と愛媛とのつながりが再発見されるとともに，愛媛の認知度が上がった。参加いただいた図書館，団体の皆様に改めてお礼申し上げる。

【終わりに】

私は懇親交流会の「閉会挨拶」で，次のように語った。

大会要綱の写真は，四国八十八ヶ所霊場第44番札所菅生山大寶寺です。私の同級生の家でもあり，よく遊びました。四国には「おせったい」という文化があります。これはホスピタリティです。会場にある愛媛大学附属高校の生徒が育てたみかんから絞ったジュースもその一つです。

愛媛県立図書館は，今年，開館90周年を迎えました。この記念すべき年に，皆様に出会えたことは，われわれの財産です。

また，第111回にちなんだ「トリプルワン・プロジェクト」へのご参加ありがとうございました。みなさまのご協力で「えひめ」の認知度も爆上がりです。

これは，まさに「図書館が　彩る未来　伊予路から」。明日も白熱した大会となることを祈念して，懇親交流会を閉じます。

この思いは「第112回全国図書館大会石川大会 図書館が希望をつなぐ－学びと再生の地・石川から－」につながると確信している。

（まつおか　とおる：愛媛県図書館協会長，愛媛県立図書館長）

★第１分科会 公共図書館★

社会教育機関としての公共図書館の可能性

――学び合い、共に愉しむ場を目指して――

小池ひろみ・坂本美有紀

第１分科会は，公共図書館が社会教育機関として人々のつながりと学びをどう創出するかを語る場となった。

【基調講演】「社会教育機関としての公共図書館の役割を考える視点」青山鉄兵（文教大学人間科学部准教授）

社会教育とは何かを考察し，自発的な学びを誘う“うっかり学習”支援の重要性について述べた。さらに人々がつながり地域と関わるために，図書館は“本棚の手前”で仕掛け，関係性を創出できることを示した。講師はリアルタイム投稿ができるチャットツールを活用して参加者の声を取り入れながら講演を行った。

【基調講演】「４つのコミュニティでウェルビーイングに生きる」若松進一（人間牧場牧場主）

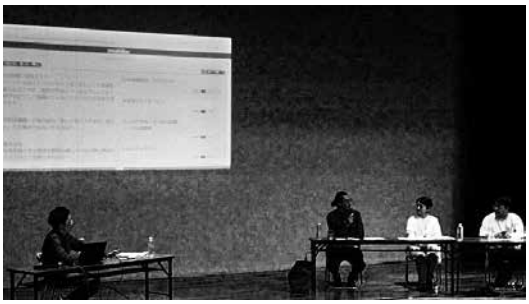
自身に影響を与えた本との出会いを原点に，家庭・地域・ボランティア・アナログ／デジタルの４つのコミュニティで活動してきた歩みを語った。観光振興やまちづくり，体験教育などの実践を紹介し，これからも未来年齢を楽しみ，本や図書館から得るヒントにワクワク，ドキドキ，ジーンとしながら人生を歩みたいと結んだ。

【クロストーク】「社会教育の可能性」青山鉄兵，若松進一

まちづくりは経済ではなく人を中心に据えるべきだと語り合い，図書館や公民館が人をつなぐ拠点となる社会教育的役割を確認した。ゼロ予算でも情熱と継続で地域を動かした若松氏の実践を踏まえ，未来へ向けて人の力を信じる希望に満ちた対談となった。

【事例報告】「佐川町立図書館さくとで育まれる学び合いのサイクル」大道剛（佐川町立図書館地域プロジェクトマネージャー）

2024年12月に開館した同館は「知りたい・学びたい・やってみたい」という意欲を支え，活動をつなぐ広場として整備された。「学び合いのサイクル」は地域へと広がり，図書館はその記録を未来に継承する使命も担うと報告された。



【事例報告】「〈あそび〉から生まれるみんなの図書館」上杉朋子（真庭市図書館振興室・中央図書館課長補佐（司書））

「図書館そだて会議」で策定した「真庭市図書館みらい計画」の５つの行動の柱をもとにイベントを実施している。一人ひとりの意見を尊重し，工夫する余地や“かかりしろ”，〈あそび〉の部分がある活動を行っていることや，継続するための予算と人材の確保という課題が報告された。

【事例報告】「社会教育士×図書館でできること－図書館を拠点にした市民協働の実践」蔦木伸一郎（たんば社会教育士コミュニティ代表）

社会教育士として異なる立場の人々をつなぎ，協働のプロセスを設計した実践が契機となり，図書館ビジョンの実現のために「みんなのとしょぶTAMBA TOSHO BU!」を立ち上げた。新しい協働のかたちとして，図書館を「共創の拠点」として発展させていくと述べられた。

【ディスカッション】「社会教育機関としての公共図書館の可能性」〈パネリスト〉大道剛，上杉朋子，蔦木伸一郎，〈コーディネーター〉青山鉄兵

青山氏が参加者の質問や意見を収集し反映させながら，報告者とともに公共図書館の可能性を探った。多様な学びの場を創出するため，市民協働や外部連携の重要性と持続可能な運営体制の確立という課題が全体に共有された。

（こいけ　ひろみ：松山市立中央図書館，
さかもと　みゆき：八幡浜市立市民図書館）

★第２分科会　大学・短大・高専図書館★

研究支援と図書館

清家芳郎

第２分科会は，愛媛大学南加記念ホールで開催された。前日の開会式・全体会から一転してあいにくの空模様となったが，全国各地から多くの図書館関係者や学生に参加をいただいた。２件の基調講演，事例報告，パネルディスカッション，さらに関連事業として実施したポスターセッションなど，多彩なプログラムが展開された。開催にかかる準備に１年以上を要し，苦労も少なくなかったが，プログラム全体を通して，参加者相互で図書館に対する想いや課題意識を共有することで，未来に向けた大学・短大・高専図書館や研究者支援のあり方を見つめ直す良いきっかけになったのではと感じている。

基調講演１：「図書館が闇に光を差し向ける時ー差別法時代のアメリカで自己尊厳を育てた黒人作家たち」

ウェルズ恵子（立命館大学文学部国際コミュニケーション学域特任教授）

これまでの大学図書館との関わりや，研究の過程で訪問した海外の図書館の紹介を交えながら，人種差別による困難に直面していた20世紀前半のアメリカにおける黒人作家たちにとって，図書館がどのように彼らの知的探求を支え，心の拠り所となっていったかについてお話をいただいた。図書館という場が持つ力と可能性をあらためて実感し，深い感銘を受けた。

基調講演２：「恐竜研究にみるデジタル・ライブラリーの力」

河部壮一郎（福井県立大学恐竜学部教授，福井県立恐竜博物館研究員）

CT 技術や大型放射光施設を用いた最新の恐竜研究の成果を取り上げながら，教育や展示に革新をもたらしているデジタル・ライブラリーによる研究成果の蓄積・公開の重要性についてお話をいただいた。また，博物館研究員としての立場から，今後の恐竜研究の進展には欠かせない，図書館と連携した情報基盤の整備に大きな期待を寄せておられた。

事例報告：「図書館員として研究者と働く×研究者として図書館員を見る」

諏訪敏幸（大阪大学）

図書館員と研究者という二つの視点を持つ講師から，文献検索相談は，支援モデルに基づくものではなく，研究者・図書館員それぞれの専門性に基づく共同の探索活動であり，部分的な多職種連携であるとのお話をいただいた。最後に，図書館職員は常に専門家としての自覚を持ち，研鑽に努め，責任ある行動を取るべきであるとの有り難いお言葉をいただいた。

パネルディスカッション

ファシリテーター：野村美千江（聖カタリナ大学副学長）

講演・報告をいただいた講師陣に加えて，愛媛県内で活躍する大学・高専図書館の職員も参加し，自由なディスカッションを行った。会場参加者から寄せられる質問に回答しながら，電子ジャーナルの価格高騰や，図書館職員の組織的な人材育成などにも話題が広がり，予定の時間を超えて，活発な意見交換がなされた。

関連事業：ポスターセッション「わが図書館のいち“推し”紹介」

第２分科会の関連事業として，ポスターセッション「わが図書館のいち“推し”紹介」を開催した。14の大学・短大・高専図書館が参加し，特色ある取り組みや工夫を「いち“推し”」としてポスター形式で紹介した。昼食休憩時にはとりわけ多くの来場者が訪れたことで，会場は大いに賑わいを見せた。ポスターは今後，希望のあった４団体で巡回展示の予定である。

（せいけ　よしろう：愛媛大学図書館）

★第３分科会 児童・青少年の読書活動支援★

読書の力で育む子どもの未来
――読書活動支援の工夫と実践――

川端恵美

本分科会は，「学校図書館」と「児童サービス」の合同開催とし，双方の立場から読書活動支援における工夫と実践を学び合う場とした。

【基調講演】「誰でも書けるって本当に？～ショートショートの書き方講座と，そのすすめ～」
田丸雅智（ショートショート作家）

楽しみながら短い物語を生み出す方法を参加者とともに体験的に探った。まず，日常の中に物語の種を見付ける視点を紹介。発想の起点となるキーワードの選び方を解説した。続いて，「もし○○が△△だったら？」という形で自由に想像を膨らませ，物語を組み立てるワークを実施。参加者からは，自分の思考よりも早く動いて結論を導き出してくれる「素早く動く鉛筆」など多彩なアイデアが生まれた。物語を創作することは脳のトレーニングになり，ありふれた日常を多角的に捉えられる営みであると紹介し，創作の楽しさを伝えた。

その後，子どもの表現力を引き出すための工夫として，心理的安全性を確保して想像力を萎縮させないようにすること，参加者の内面から答えを引き出す姿勢で進めること，添削をしないことで個人の想像力を尊重し，自己表現を促進する環境を作る重要性を紹介。講座を通して，図書館が読書から創作へと広がる場となる可能性を感じさせる時間となった。

事例報告では，令和６年度子供の読書活動優秀実践校・図書館文部科学大臣表彰を受賞した小学校・中学校・公共図書館の取組に加え，令和６・７年度愛媛県高等学校教育研究会図書部会の研究委嘱校による実践を紹介した。

【事例報告①】「島の子どもと本を結ぶかけ橋に」
菅　朗子（今治市立大三島図書館監督主任）

島ならではの地域連携や異世代交流から生まれる読書推進の取組事例について紹介。小学校への出張読み聞かせや夏休みの課題おたすけ教室等，読書活動や図書館体験の機会を多様に提供することで，島に住む子どもの視野を広げる支援をしている。

【事例報告②】「本好きな荏原っ子を育てる読書活動の推進」
武田理栄（松山市立荏原小学校学校図書館主任）

本に触れることで心を豊かにする体験を重視し，児童が自ら進んで図書館を訪れたくなるような積極的な読書習慣の形成をめざした多彩で継続的な取組を紹介。特に，地域のボランティアや図書委員との協働を通じて，読書の楽しさを自然に感じられる場を提供している。

【事例報告③】「思いや考えを創造する読書活動の工夫」
松本裕子（宇和島市立城北中学校教諭）

生徒主体の読書活動を推進し，読書を通じて豊かな心を育むことを目指した実践を紹介。季節ごとの特設コーナー設置やポップカードコンテストを通じて読書への関心を高め，ビブリオバトルを行って生徒が本を紹介する場を提供するなど豊かな読書体験を提供している。

【事例報告④】「ものづくり　ひとづくり　吉高図書館からの挑戦」～もう１行　もう１ページ　もう１冊　知と技を広げる図書館教育～
山中　恵（愛媛県立吉田高等学校研修厚生課長・研修主任）

図書館活性化に向けて，工業科生徒の技術を生かした「ものづくり」視点で環境整備を進め，より利用しやすい空間を作成。また，図書委員会や地域図書館と連携し，読書啓発活動を展開。生徒が積極的に関与し，図書館への親しみを深める活動を実施している。

（かわばた　えみ：愛媛県立図書館）

★第４分科会　図書館とデジタル化★

図書館とデジタル化

――OPACから生成AI、そして次にくるもの――

杉本重雄・植村八潮

1990年代に始まるインターネットの発展とスマホに代表される携帯端末の普及によって我々を取り巻く情報環境は劇的に変化した。こうした情報環境の変化が始まる以前から，図書館では空間的な距離を越えて，利用者が必要なコンテンツにたどり着けるようにするためにサービスのデジタル化が進められてきた。最近のAI技術を利用した高い能力を持つサービスの登場は，言語の違いや表現メディアの違いを越えて，効率的に必要なコンテンツへのアクセスを可能にし，図書館サービスに質的な変化がおきることも期待させてくれる。他方，利用者である人間にとっては，物理的な環境から五感を通じて得られる情報も重要な意味を持つ。それに加えて，図書館にはデジタルコンテンツ化の難しい資料も多くある。図書館には，物理，アナログ，デジタルを問わず，いろいろな技術とメディアを総合的に利用して，さまざまなコンテンツとそこに表された知識と，それを必要とする人を結びつけることが求められる。そして，そうしたサービスを介して人と人をつなぐ役割も求められる。

今回の全国図書館大会では，従来の委員会の枠組みにこだわらず，現状の図書館の抱えている課題，問題点，話題を中心にテーマ設定がなされることとなり，本分科会はその一つとして図書館とそこにおけるデジタル化に焦点を当てたものである。社会のデジタル化が進む中で，図書館の進化と発展のために先端的な情報技術は避けては通れない。一方，新しい技術やメディアはわかりにくく，現場での導入に躊躇しがちになることも見受けられる。こうした理解の下に，本分科会では，生成AIといった最近の話題に特化することはせず，図書館とそのデジタル化についての包括的な議論を通じて，社会環境のデジタル化による変化を俯瞰し，図書館のこれからを考える機会とすることを目的として，以下の６件の講演とそれに続くパネル討論で構成した。

- 杉本重雄（筑波大学）「図書館とデジタル化ーこれまでを知り，これからを考える」
- 植松貞夫（筑波大学）「資料・情報のデジタル化と図書館建築」
- 植村八潮（専修大学）「最近の電子図書館サービスとその利用状況」
- 植村　要（国立国会図書館）「電子図書館におけるアクセシビリティ」
- 大井将生（同志社大学）「図書館の価値を高めるデジタルアーカイブ活用法」
- 中島玲子（慶應義塾大学）「生成AIと図書館サービス」

パネル討論には，講演者に加えて池内有為（文教大学），原田隆史（八洲学園大学）が加わった。なお，本分科会は，午前２時間，午後３時間からなる全日の分科会として開催し，午前，午後ともに約100名の参加者があった。これは，この領域への興味関心の高さを示していると言え，今後もこうした機会を提供できればと考えている。

図書館では，現在までにサービスのデジタルシフト，デジタルアーカイブに代表されるデジタルコンテンツの充実化が進められてきており，最近ではSNSの広がりやAI技術の急速な進歩によって出現した情報の信頼性や真正性への要求，AI技術を利用した図書館サービスの充実といった新しい課題への対応が求められている。参加者にとって，本分科会が，図書館においてデジタル化のためにこれまでどのような努力がなされ，現在どのようなことが進められ，そしてどのような課題があるかを知り，その上でこれからの図書館とそこにおけるデジタル化についての総合的な理解を深める機会となったことを願っている。

末筆ながら，愛媛県立図書館をはじめ大会の運営に関わられた全ての方々に感謝の意を表したい。

（すぎもと　しげお：筑波大学，うえむら　やしお：専修大学）

★第５分科会 災害と図書館★

災害への備えと対応

鈴木史穂

基調報告「ユニバーサルデザイン　安全な図書館施設」
川島宏氏（JLA 図書館施設委員会・図書館災害対策委員会委員）

不特定多数の人が利用する図書館は，ユニバーサルデザインによる安全安心な施設であることが求められる。各地の火災・地震・水害等の被災状況を写真と図で示し，建築士の視点による指摘と解説がなされた。「立地」，「建物」，「建物の周辺」，「家具類」の安全性を確認すること，被災地調査・活動記録から得られた教訓から防災・減災のための計画や行動，普段の備えが有効である。

事例報告「能登半島地震の被災地支援」
山上敬良氏（石川県立図書館職員）

令和６（2024）年能登半島地震と，同年９月に発生した奥能登豪雨による石川県内図書館の主な被災状況と，石川県立図書館が行ってきた市町図書館への支援について報告があり，県立図書館のネットワークを活かした物資の支援と，必要とされるときに現地でサポートできる県立図書館職員の支援など，被災地の県立図書館に必要とされた市町図書館支援について語られた。

事例報告「西日本豪雨　洪水被害からの復興」
渡辺晃氏（宇和島市立簡野道明記念吉田町図書館主任）

平成30（2018）年７月豪雨で土砂災害に加え，約４万冊の図書が浸水し，被害が甚大だった宇和島市立簡野道明記念吉田町図書館の被害への対応，復旧作業，資料保存への取り組みについて報告があった。自然災害に対し自館で可能な防災対策を検討し，早期に実施することの必要性，そして災害に備えた持続的な取り組みを行うことの重要性が示された。

事例報告「平成30年７月豪雨災害の被災経験から」
村井明弘氏（大洲市立図書館館長）

平成30年７月豪雨災害により大洲市立図書館本館と肱川分館が浸水被害に遭った。本館では予報から危機が迫っていることを感知し，書架下段の資料を上段に一時避難させることで，館内にあった資料は浸水を免れたが，肱川分館では浸水がすぐにはじまり，被害が大きかった。被災経験から水害対応マニュアルの基本となるものを作成した。自助・共助・公助のバランスを取りながら防災・減災に取り組んでいきたいと結んだ。

講演「南海トラフ地震に備える」
鈴木章生氏（オーテピア高知図書館／高知県立図書館チーフ（支援協力担当））

複合施設であるオーテピア高知図書館は，津波浸水想定区域に立地しており，津波避難ビルの指定を受けている。2024年に「オーテピア高知図書館業務継続計画（BCP）」を策定し，実効性を高めるために複合施設の県市図書館職員，委託業者が参加する100人超のBCP机上訓練を実施した。発災時には，組織横断的な視点の下，優先すべき業務を選択し，その業務に集中することが求められる。

座談会「今後の災害に備えるために」
川島宏氏，山上敬良氏，渡辺晃氏，村井明弘氏，鈴木章生氏，西村彩枝子氏（JLA 図書館災害対策委員会副委員長），加藤孔敬氏（JLA 図書館災害対策委員会委員）

「災害への備えと対応」をテーマとした座談会により，災害への備えから実践的な災害対策について話し合われた。

（すずき　しほ：福島県立図書館）

★第６分科会　出版社・書店・図書館★

地域をつなぐ、地域とつながる図書館と書店

――出版社・書店の現状を認識し、読書文化を守るため、図書館に何ができるかを本気で議論する――

成瀬雅人

「出版，書店，図書館」を取り上げた第６分科会では，豊かな読書環境を目指して書店と図書館が共存できる方策を考えるため，基調講演と事例発表が行われた。

基調講演には，代表的な文芸出版社である新潮社の佐藤社長が登壇した。佐藤社長は10年前の全国図書館大会東京大会でも講演し，文芸書出版維持のため，図書館における複本問題を取り上げたが，今回は自社の収益構造を紹介しながら，文芸書の出版状況をわかりやすく説明した。新潮社がある年に出版した小説，ノンフィクション300点の６割が赤字で，売上上位５パーセントの作品の利益が全体を支えているとのこと。それらいわゆるベストセラーの売上が損なわれると経営が成り立たなくなる。売上の減少の背景には，2005年からの20年間で書店が45パーセント，１万軒消えてしまったことが大きく，かつて問題視した複本は，この10年で公共図書館の資料費が減少し，多くの図書館で複本を揃えることは現実的でなくなっているなか，大都市圏の一部では続いている状況もあり，詳細な検証が必要であると訴えた。誰もが読書をして豊かな人生を送ることが，出版，書店，図書館で働く人々の願いであり，そのためにそれぞれの役割を考え直すきっかけとなる，考えさせられる講演だった。

事例発表では，まず筑波大学の池内准教授が，離島など，読書環境に恵まれない地域を図書館情報学研究者たちで訪れた時の見聞を，多くのスライドを駆使してユーモアたっぷりに報告した。ほとんどの参加者にとって未知の内容であり，興味深く貴重な発表となった。

次に，県立長野図書館の森館長が，長野県における書店と図書館が連携した取り組みについて発表した。かつてはコミュニケーションをとる機会もなかった県の書店商業組合と県の図書館協会が協働して，今年６月にはフォーラムを開催するなど，対話の場が生まれた。読者第一の発想で多少の利害関係は乗り越えられるとする強い意志を感じた。

公立はこだて未来大学情報ライブラリーの司書栗谷さんは，毎年開催しているブックフェアの取り組みを紹介した。地元書店の協力で見計らいで集めた書籍の中から学生，教員が2,000冊選書するイベントで，毎年たいへんな賑わいとのこと。学生の思いもよらぬ本の選択など，興味深い発見も多く，手間はかかるが意義を見いだしている。そのベースにあるのは学生を信じること，という言葉が心に残った。

徳島県美馬市の美馬市立図書館梶浦館長からは，地域資料をフル活用して幅広い市民の図書館利用を活発化しているさまざまな活動が紹介された。指定管理者としての運営でも，自治体との良好な関係でここまでできる，という好事例であった。

（なるせ　まさと：株式会社原書房）

★第７分科会 専門図書館・健康情報★

愛媛から市民と共に未病・健康・医療を考える

――健康・医療情報提供とヘルスリテラシー――

深水浩司

本分科会は，JLA専門図書館部会と同健康情報委員会の共催で，午前は部会による病院図書室等３件の事例報告，午後は委員会による二つのグループワークを実施した。

まず，松長聡美氏（松山市民病院司書）から，病院図書室（地域医療従事・関係者のみ利用可）の現状と問題点が報告された。ミッションを「学術支援を通じて人材育成を図り，医療の質向上へつなげ，ひいては，地域医療に貢献すること」とし，図書室活性化を図った。積極的な電子ジャーナル導入とリモートアクセス化，レファレンスサービスの充実，NACSIS-ILL導入による効率化などで，病院内外からの利用者は格段に増えた。しかし，一人職場による運営の問題や，外国雑誌高騰による予算問題など課題は多い。また，医療従事者の情報リテラシー向上に貢献する専任司書の必要性等も再認識できた。

次は，河野麗氏（宇和島市立中央図書館司書）と川中真紀氏（市立宇和島病院医事課地域連携係長）から，図書館と病院（がん相談支援センター）連携の報告。がん相談支援センター企画立案の「寄託図書事業（2020年）」で，翌年，図書館内に「がん情報コーナー」を新設。寄託図書は医療専門職推薦で選書し，わかりやすい語による７分類とNDCを併用。利便性の良い「パフィオうわじま」の図書館へのコーナー設置で，がん情報へのアクセスは４倍にも向上した。今後の課題は，より広い広報活動と，連携深化による信頼性の向上である。

最後は，﨑田智美氏（愛媛大学医学部附属病院副病院長・看護部長）から，患者図書室「ひだまりの里」（「医療の質に関する研究会」支援のもと，ボランティア「いきいき会」とともに開設）の報告。専門看護師選択の医療図書を含めた4,500冊以上の利用と，医師作成動画提供，小児病棟患者向け遠隔授業（動物園等）も実施。「自分で調べることで客観的な判断ができた」との感想から，ヘルスリテラシー推進効果も表れている。職員と情報で「患者と医療従事者」の関係深化を図りつつ，ボランティアによる温もりのある空間で，安心して治療に取り組める患者の姿を想像できる報告だった。

午後は，柚木聖氏（浦安市立図書館）から，健康情報サービス略史と委員会活動概説の後，久保田崇子氏（埼玉県立熊谷図書館）から，ヘルスリテラシーの講義を行った。医療従事者お任せだった医療は，今や市民が情報を集め，選択・決定をする時代になった。それゆえ内容（「い・な・か・も・ち」の視点等による）チェックは重要である。その上で，公共図書館等の取り組みや，ヘルスリテラシー研修，情報評価手法についての解説があった。

講義後，甲藤梨彩氏（高知県立図書館）進行のグループワーク１では，５グループで異なる医療情報資料について，PEMAT-P項目の評価をグループでまとめ発表した。情報作成側（情報提供者側）の意識と利用者との差をいくつか発見できた。

グループワーク２に先立ち，牛澤典子氏（東邦大学医学メディアセンター）から，米国国立医学図書館研修プログラム「健康コレクションマネジメントと健康情報の評価」より，情報評価・蔵書構築のプロセスが説明された。

グループワーク２は，磯部ゆき江氏（(株)未来の図書館研究所）の進行で，前述プログラムの中から「地域に根差した健康情報」を抽出するブレインストーミングを実施した。今回のテーマは①利用者の健康情報に関する要望は何か，②地域社会の健康に関する関心や懸念は何か，③図書館や病院に来ない地域の人々に働きかける方法は何か，の三つである。付箋紙にアイディアを出し，テーマ内でグルーピング後，ネーミングした結果を模造紙にまとめ発表した（各グループ３分）。

各自の経験によるアイディアは今後の医療情報作成や提供に役立つだろう。

当初参加者が少ないことが懸念された本分科会だが，広く全国からの参加と四国各県内からの参加者により，盛況のうちに終了した。ご参加いただいた皆様に，深く感謝申し上げます。

午前参加者数：32名　午後参加者数：25名

（ふかみ　こうじ：大妻女子大学）

★第８分科会　インクルーシブな図書館★

障壁のないインクルーシブな読書環境の整備に向けて

岡部幸祐

第８分科会は，「インクルーシブな図書館」をテーマに，読書や図書館の利用におけるさまざまな障壁への気づきを促し，「誰一人取り残さない図書館」の実現に向けた図書館での取り組みを考える分科会とした。

【基調講演】「読書環境におけるさまざまなバリアとそれらを解消する取り組み」
野口武悟（専修大学文学部教授）

16歳以上の「不読」（文化庁調査）の理由として，視力などの健康上の問題も挙げられている。読書における読みづらさも「文字が認知しづらい」「本を持ったり・ページをめくったりしづらい」などと多様である。さらに，図書館利用のしづらさも読書のバリアとなっている。これらを個人の問題にとどめず，読書環境のバリアと捉えて，読書環境を改善する取り組みが求められている。バリアを取り除くため，図書館においても，DEI（Diversity，Equity，Inclusion）を意識して，「読書バリアフリー」はもちろんのこと，「手話によるサービス」「認知症バリアフリー」「多文化サービス」「性的マイノリティに配慮したサービス」「アウトリーチサービス」「医療健康情報サービス・病院患者図書館」「刑事収容施設（刑務所）図書館」などの取り組みの一層の充実が求められる。

【講演】「「開かれた」メディアとしての「本」づくりは可能なのか？」
成松一郎（読書工房代表）

市販されている「本」のデザインやレイアウト編集の面からみて，文字サイズ・フォント（書体）や本の用紙，文字の刷色の違いが，本の読みやすさに違いをもたらすことが分かる。そこにも「本がもともと持っているバリア」が潜んでいる。

2019年の読書バリアフリー法施行以降は，出版社にも本の作り手として，当事者の役割が求められるようになっているが，それに積極的に取り組む出版社はあまり多くはない。そのような中，大きな文字の児童書出版や「日本語多読」本の出版

などに取り組む出版社の事例もある。また，学校や図書館の現場でも「読書バリアフリー」をもっと取り上げていくことが必要である。

【講演】「文化的・言語的なバリアと『やさしい日本語』」
阿部治子（日本図書館協会多文化サービス委員会副委員長）

在留外国人数は過去最多を更新し，日本の多文化社会化は進んでいる。図書館の「多文化サービス」とは，通常のサービスや資料を利用できない，利用しにくい，文化的・言語的少数者を主な対象とする図書館サービスで，「やさしい日本語」は，外国人にもわかるように配慮した，簡単な日本語である。言葉だけでなく，表情や話し方にも配慮しているため，高齢者や障害者，子どもにとっても，わかりやすいものとなる。

住民の13％が外国籍の豊島区の区立図書館では，「やさしい日本語」による館内掲示を行い，LLブックや日本語多読本，多言語での生活基本情報の提供も行っている。また，音声付きの本は，日本語の文字・活字を読むことが困難な外国人住民だけでなく，視覚に障害のある方，読み書きに障害のある方など，「本を読むこと」が困難な方にも読書の楽しみを感じてもらえるものとなる。

講演の後の質疑応答では，終了時間まで参加者から活発な質問が寄せられ，今後も継続して「インクルーシブな図書館」をテーマとした分科会の開催が期待されるものとなった。

（おかべ　こうすけ：日本図書館協会）

★第９分科会 障害者サービス★

四国から
――読書バリアフリーを進めるために――

小原亜実子

本分科会では，図書館の障害者サービスを行う上で重要な二つのWEBサービス（「みなサーチ（国立国会図書館障害者用資料検索）」と「サピエ図書館」）の最新の活用方法の紹介と今大会開催地である四国において県レベルで読書バリアフリー計画を策定している徳島県・高知県から取組事例が発表された。

障害者サービス資料の提供のために今日から使えるWEBサービスの紹介とともに読書バリアフリーへの具体的な取り組みを館種の異なる両館から報告いただくことで，既に読書バリアフリーに取り組む図書館にも，これからという図書館にも，さらに図書館以外の方が図書館の障害者サービスの現状と取り組みに触れることにも，有意義な機会となった。

【講演】「視覚障害者はみなサーチ（国立国会図書館障害者用資料検索）をどのように利用するか」杉田正幸（国立国会図書館利用者サービス部サービス運営課／JLA障害者サービス委員会委員長）

国立国会図書館が提供する「みなサーチ」は，全国の図書館等が登録したアクセシブルな書籍（約632万件）を一元的に検索でき，一部資料の全文テキストデータ（約319万点）をダウンロードすることもできるデータベースである（数は2025年９月末現在）。その特徴の紹介とスクリーンリーダーを使った操作方法が紹介されたことで視覚障害等のある人自身による操作方法についても知ることができた。

【講演】「読書が困難な方のための電子図書館『サピエ図書館』の活用方法～スマートスピーカーによる実演を中心に～」西村浩生（全国視覚障害者情報提供施設協会サピエ事務局長）

「サピエ図書館」は全国の図書館等で活動する約２万人のボランティアによって製作されているアクセシブルな図書を検索・入手できるWEBサービスである。

今年度からAmazonのスマートスピーカーで利用できるようになり，その操作が実演された。

声だけでサピエ図書館を利用でき，PC等従来の

機器を操作することが難しい方々でも図書を利用できる可能性を学ぶことができた。

【事例報告】「徳島県における読書バリアフリー推進事業の取組み」三井貴浩（徳島県立障がい者交流プラザ視聴覚障がい者支援センター主任支援員）

徳島県立障がい者交流プラザ視聴覚障がい者支援センターは，視覚・聴覚に障害のある方への支援と障害者のICTサポートを行っている施設である。読書バリアフリー計画に基づき，資料提供，公共図書館等職員向け研修会を行うほか，高校生向けの音訳／点訳講習会・録音図書製作体験を実施していることが印象的だった。

【事例報告】「オーテピア高知図書館におけるバリアフリーサービスについて」戸苅綾子（オーテピア高知図書館／高知市立市民図書館主査）

オーテピア高知図書館は，2018（平成30）年７月に開館した全国初の県市共同運営図書館である。読書バリアフリー計画に基づき，読書や図書館利用に障害がある人は，障害者手帳がなくても障害者サービスを受けることができる。県内に図書館も書店もない地域が存在するため，広域的な資料提供・研修体制が整備されている点が特に印象的であった。今後の課題は事業のPRとされている。

質疑応答：杉田正幸，西村浩生，三井貴浩，戸苅綾子

「みなサーチで聴覚障害のある人向け資料のダウンロードは可能か」「読書バリアフリー計画の特色」「若い世代にサービスをPRする具体的な手法」などの質問が寄せられた。

（おはら あみこ：大阪府立中之島図書館）

★第10分科会　資料保存★

持続可能な資料保存（環境管理）

田﨑淳子

昨今注目される「持続可能な」目標設定や考え方は，資料保存の取り組みにも相通じる点が多い。特に環境管理は地球温暖化対策の動向と関わりが深く，燻蒸剤「エキヒュームＳ」が販売停止となった現在，化学的防除に依存しない予防的管理の重要性が一層高まっている。生物被害を未然に防ぐために，持続可能な資料保存対策を講じることが求められる時代となっている。

【基調講演】「図書資料をまもる環境づくり－地球温暖化とどう向き合うか」水谷悦子氏（独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所保存科学研究センター研究員）

地球温暖化対策として温室効果ガス排出削減が求められる中，図書館における環境管理の考え方も「持続可能」という側面からのアップデートが必要となる。美術館・博物館における保存環境のガイドラインも持続可能性を考慮したリスクベースの対応に転換が図られ，温湿度目標値の再考等，環境負荷削減と保存環境管理の両立が模索されている状況が紹介された。

カビの発生に適した環境であっても，目視可能なレベルまで成長するには一定の時間を要する。各館において，建物・部屋の特徴（断熱性や内部の温度差／階数／面している壁（内壁・外壁）／窓の有無／扉の気密性等）や，空調設備の特徴（吹出・吸込口の位置／吹出空気の温湿度と流量／センサーの位置等）に応じた対策を考え，日常的な清掃やモニタリングを組み合わせることで，カビの発生が重大な問題とならないように制御することが可能である。また，このような取り組みを個々の館だけの問題と考えず，業界全体のテーマとして共有していくことが肝要である。

【事例報告】「三康図書館における利用のための資料保存と環境管理の取り組み」新屋朝貴氏（公益財団法人三康文化研究所附属三康図書館）

私立大橋図書館の蔵書を引き継ぐ三康図書館は，2000年に発生した書庫内の大規模カビ被害に対し，東京文化財研究所の支援を受けて対策を行った。それから現在に至るまで，書庫内に空調設備を備えずにカビの発生を抑制している状況が紹介された。脱酸処理や和装本の修理，除湿機と扇風機の組み合わせによる書庫内の温湿度管理や埃除け，書庫内の清掃状況等現在行っている取り組みについても率直に共有された。

【発表（報告）】「IPMの視点で取り組む“清掃”について」下川可容子氏（株式会社タクト）

資料保存の諸問題の基本的対策であるIPM（Integrated Pest Management：総合的有害生物管理）の５段階制御（回避→遮断→発見→対処→復帰→…）を踏まえて，観察と点検を目的とし，持続可能な計画と効率化を図るIPM清掃について紹介された。

部屋（区域）ごとに清掃計画を立てること，適切な清掃によりきれいな状態が維持されると異常を発見しやすいこと，虫害やカビの被害に当たる際はルーペやLEDライトによる確認が有用であること，記録を取りつつ問題点や課題を整理すること等，実践に当たってのポイントが多数示された。IPM清掃は資料や環境管理上の問題点を見つける作業であり，一足飛びに完璧を求めず，無理なく継続的に取り組めることも重要である。

（たさき　じゅんこ：JLA資料保存委員会）

★第11分科会 図書館の自由★

図書館の自由・この一年

山口真也・鈴木崇文

本年（2025年）は，「戦後80年」にあたるとともに，図書館の自由委員会の前身である「図書館の自由に関する調査委員会」が活動を開始して50周年，さらに，自由宣言と「表裏一体」の関係にあたる「図書館員の倫理綱領」が決議されてから45周年という節目の年でもあった。本分科会では，「図書館の自由」が置かれている現状を正しくとらえ，図書館の自由をめぐるさまざまな課題を，図書館関係者はもちろん，図書館に関心を寄せる方々が主体的に受け止め，自律的に考え，学び直す機会とすることを目的とし，動画配信形式で開催した。

基調報告「図書館の自由・この１年」

（山口真也・JLA 図書館の自由委員会委員長）

「資料収集・提供の自由をめぐる出来事」としては，＜参議院外交防衛委員会での全国SLA 選定図書への批判＞＜資料購入における財政削減の影響＞＜PTA 未加入の生徒の学校図書館利用制限＞＜差別的表現を理由とする出版物への異議，回収・交換要請＞について取り上げ，自由委員会による関係者への聞き取り結果や見解を説明した。＜第２次トランプ政権発足後の米国の図書館の状況＞については，性的マイノリティや人種問題をテーマとするYA 向け図書への禁書の動きが公共図書館から学校図書館にも広がっていること，そうした状況がDEIに関するデータ削除，大学助成凍結，IMLS 廃止命令，議会図書館長解任など，第二次トランプ政権発足後もますます混迷していることを紹介した。あわせて，戦後の日本の図書館界にとって常に重要なモデルであり続けてきた米国の変容がSNS 上の言論空間の分断によって生み出されていること，そうした問題は日本においても広がりつつあることを指摘した。米国の知的自由の危機的状況は決して「他人事」ではなく，日本の図書館にもつながる出来事として問題意識を共有したい。

「プライバシー保護をめぐる出来事」としては，＜フィクションの中で繰り返されるプライバシー侵害＞＜サイバー攻撃によるサービスの停止＞＜地域を巡回する移動販売車への資料返却＞＜行政機関等匿名加工情報に関する提案募集の動向＞を取り上げ，捜査機関への原則的な対応や不正アクセスへの対策強化・研修の必要性を確認した。新しいトピックとしては，DX の推進の流れの中で個人情報の捉え方が変わってきていること，さらに人口減少社会においてサービスを維持する上で図書館員以外との協働の中でプライバシーをどう扱うべきか，委員会の見解を説明した。また，＜「防犯カメラ」の設置・運用のあり方＞では，防犯対策としての有効性や設置を検討する体制，効果の検証方法，顔認証カメラの導入の是非などの留意点を説明した。2025年７月に本委員会の見解文書「図書館における「防犯カメラ」の設置・運用について」が公開されているので参照してほしい。

参加者からは本分科会がオンライン開催となったことが『雑誌』の招待文からは分かりづらかった，というご意見もあった。総視聴数が少なかった点も課題である。図書館の自由について問題意識を共有する場として図書館大会をどのように位置づけるか，次年度に向けて検討したい。

（やまぐち　しんや，すずき　たかふみ：
JLA 図書館の自由委員会）

★第12分科会　非正規雇用職員★

非正規雇用とキャリア形成

西川啓子

非正規雇用率が７～８割に及ぶ公共図書館や学校図書館の職員が，専門職としてキャリア形成を行うには，どのような姿勢や方法が必要だろうか。本分科会では，調査から見えた課題や現状を確認したうえで，非正規雇用からキャリアを積んで正規雇用に転換した司書のケース報告や，非正規職員のキャリアアップの仕組みを構築する自治体の事例紹介などを通して，非正規雇用職員のキャリア形成について考える場となった。

基調報告「日図協調査（公共・学校）に見る非正規雇用職員の能力開発とキャリア形成」
小形　亮氏（日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会　委員長）

日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会は，これまでに公共図書館と学校図書館の非正規雇用職員に対して，それぞれ調査を行ってきた。その結果，キャリア形成についての個人の意識や実態・研修機会などに関して，能力開発への意識は高いが研修機会は十分とは言えない状況がうかがえた。また，非正規雇用職員のキャリア形成は一様でなく，雇用形態の多様化に合わせた制度設計が求められるなどの課題があることが報告された。

事例報告Ⅰ「非正規雇用職員としてのキャリア形成」
岩永知子氏（相模原市議会議会局政策調査課）

公共図書館の非正規雇用職員から他自治体の正規職員へと転職したという経歴を持つ報告者からは，「与えられた場で学び，経験を積み重ねることがキャリア形成につながる」という常に前向きな姿勢や「自分がどのような司書を目指すのかを考え，学び続けることが大切」という言葉，それまで行ってきた仕事を確認し振り返る作業として，認定司書資格を取得したという経験が紹介された。

事例報告Ⅱ「非正規雇用職員のキャリアアップと能力開発」
大場康智氏（荒川区立ゆいの森あらかわ）

報告者が勤務する荒川区は，非常勤職員の能力と職務経験を適切に評価し昇格・昇給を可能とする独自の職層制度を導入している。図書館においては東京23区で唯一直営方式の運営を維持し，「図書専門員」として６段階の職層を設けて長期的なキャリア制度を下支えしており，なおかつ豊富な研修機会を確保して非正規雇用職員のキャリアアップを可能にしている。正規雇用というベストなあり方ではないが，現状に即した次善の策といえるのではないか，という報告があった。

事例報告Ⅲ「指定管理者の中でのステップアップ」
久川文乃氏（指宿市立山川図書館）

学校図書館と公共図書館の司書を経験し，さらにNPO法人の一員として公共図書館の指定管理者運営に携わり，現在は館長を務めるという多彩な経歴を持つ報告者からは，仲間と共に司書としてさまざまな学びを得るための場を自ら設け，社会的な貢献活動や自己研鑽を行い続けてきているこれまでの歩みや，今後の展望についても紹介された。

ディスカッション
司会：青柳英治氏（明治大学文学部）

報告者が相互に，自らの働き方の変化や研修に関する考え方などについて，多様な観点から質問を行った。また，キャリア形成における認定司書制度についても独自の視点で意見を述べ合った。キャリア形成の基盤づくりは，司書としてのあり方を見つめる姿勢と，研修や自己研鑽の場を持ち続ける中にあるという考えが確認された。

（にしかわ　けいこ：
JLA非正規雇用職員に関する委員会，水戸市立見和図書館）

全国図書館大会に参加して

△ 第111回全国図書館大会愛媛大会に参加して △

▲ 宮崎篤子 ▲

愛媛大会では開催前から「トリプルワン・プロジェクト」が実施され，64館が参加して愛媛県の認知度向上と地域間交流の深化が図られた。この充実した準備の様子から期待を持って参加した。

初日は全体会，アトラクション，トークセッション等，多彩なプログラムが展開された。初めて観覧した伊予万歳の演舞は素晴らしく，その後の活発なトークセッションとともに時間が瞬く間に過ぎた。

全体会では手話通訳者とPC要約者が配置されており，情報保障体制が整備されていた。手話表現の学習も兼ねて見ていたが，表現が的確でスピード感があり，愛媛県における情報保障の高いレベルに感銘を受けた。

懇親交流会には多数の参加があり，愛媛県産食材を使用した料理が提供された。地元産材料の料理名表示をみかん色で統一し，ポンジュースのウォーターサーバーを設置するなど，地元色が際立つ演出がなされていた。さらに全体会講演者の高橋久美子氏による愛媛産黒糖等の物販コーナーでは，高橋氏と話したい参加者が列を成していたため，思わず販売補助をさせていただいたことが個人的なハイライトとなった。

２日目は第４分科会に参加した。６本の講演とパネルディスカッションは，図書館のデジタル化がもたらすものを網羅的に示しており，大変興味深かった。展示・協賛展示ブース巡りもあり充実した１日となった。大会終了後の「会員のつどい」では研修をテーマに他地域の事例を学ぶことができ，地元に持ち帰れる有益な内容を得られたことが大きな収穫であった。

なお，高知県図書館協会（事務局：高知県立図書館）が両日にわたり送迎車両を手配してくださり利用させていただいたが，往復の車中でも大会の話題で盛り上がり，さらに有意義な大会となった。

大会テーマの「図書館が　彩る未来　伊予路から」の通り，未来に期待を抱ける大会であったと思う。

最後に，本大会を開催し成功に導いてくださった大会実行委員会の方々に心から感謝申し上げたい。

（みやざき　あつこ：元高知市民図書館）

△ 愛いっぱいの全国図書館大会愛媛大会 △

▲ 豊山希巳江 ▲

全国図書館大会が愛媛で開催されることを知り，即参加を決めました。愛媛には，いろいろな活動をしている知人も多く，「愛媛で会いたい！」という野望がありました。

しょっぱなから大失態。大会会場に向かおうと，よく確認せず市内電車に乗り，レトロな車体を写真に収めホクホクしたのもつかの間，方向が違うことが判明。優しく対応してくださった運転士さんありがとう！

大会１日目の記念講演では，愛媛県出身作家の白川密成氏，高橋久美子氏，田丸雅智氏という豪華な顔ぶれ。「作家」という，図書館とは無縁ではなく，でも，図書館の人でもない，「間」の方の目線で語られる本のお話，図書館のお話は，愛にあふれ，とても新鮮でした。岡田有利子氏の進行もとても穏やかで的確で，圧巻でした。

大会２日目は，あいにくの雨模様でしたが，気合を入れ，今度はちゃんと確認して，市内電車で会場へ。（同じ目的の方が一緒の気配があり，とても心強かった！）

私は，第１分科会（公共図書館）に参加しました。基調講演２本と事例発表３本という，贅沢なプログラム。基調講演お一人目の青山鉄兵氏の講演は，とてもテンポよく，具体的でわかりやすく，私たちの立ち位置ともいえる，社会教育，社会教育施設とは何ぞやという「そもそも」を改めて学ぶことができました。

お二人目は，若松進一氏です。行政職員向け研修の「全国地域づくり人材塾」で社会教育を体現する氏の講演を聞いてから，いつか氏の仕掛けた「しずむ夕日が立ちどまるまち」（旧双海町）をこの目で見たいと思っていました。講師紹介に氏の名前を見つけ，このご縁に大感謝をしたことは言うまでもありません。振り返れば，12年越しの再会でした。

今回の大会は，事務局の皆様の細やかなはからいで，登壇者，懇親会の内容，趣向まで，愛媛の愛をたっぷり味わえる全国大会でした。そして，「対話の大切さ」を改めて実感しました。SNSではなくリアルで対話することで，図書館に対する思いなども語り合い，共感することができました。大会後も何日か滞在し，書店や「こども本の森松山」などを訪れ，愛媛で暮らす人と出会い，本や図書館についてお話したことも宝物になりました。私の愛媛愛はMAXです。

（とよやま　きみえ：山武市松尾図書館）

全国図書館大会に参加して

全国図書館大会愛媛大会に参加して

橋本育海

第111回全国図書館大会愛媛大会は「図書館が　彩る未来　伊予路から」というテーマにふさわしい，華やかな開会式から始まった。会場では「トリプルワン・プロジェクト」の展示が行われており，当館の特集展示「愛媛県ゆかりの作家作品紹介」も含めて，全国の図書館で実施された愛媛関係のイベントが紹介されていた。全国で参加館を募集する大きな計画にとても驚いた。

記念講演「読むこと　書くこと　生きるということ」では，白川密成氏，高橋久美子氏，田丸雅智氏が，ご自身の読み書きのルーツや今につながる経験を話された。書くことのルーツが図書館にあったという話，方言と標準語の使い分けについての話が印象深く，私も自分の言葉と向き合いたくなった。

２日目は第４分科会「図書館とデジタル化－OPACから生成AI，そして次にくるもの」に参加した。新しい情報技術が開発されていく中で，図書館員としてどのような技術や知識が必要か，特に，生成AIが質問にどこまで正確に答えてくれるのか気になっていた。

生成AIには間違えた答えを正解のように出力するハルシネーション（幻覚）現象があり，司書がレファレンスなどに利用するには精度の面でまだ時間が必要だと感じた。しかし，展示やイベントのテーマ決めや文章の翻訳，要約など業務補助的な分野では利用できることを知り，利用してみたいと思った。今後生成AIが学習を続け，ハルシネーションが減ったとしてもゼロにすることは難しいと感じる。生成AIが答えられない質問に利用者が出会ったときには司書を頼ってもらえるよう，信頼を得ていきたいと思った。また，進化していく情報技術に取り残されないように日々の情報収集を欠かさないようにしたいと感じた。

２日間の大会を通して，他業種の方も含めて多くの方に巡り合えたこと，そして図書館員として新しい知見を広く得られたことはとても大きな収穫となった。

（はしもと　いくみ：福井県立図書館）

愛媛から広がる図書館の未来

花本若奈

このたび，愛媛県では初めて開催された全国図書館大会に参加しました。１日目は全体会に一般参加し，２日目は愛媛大学で行われた第２分科会の運営スタッフとして携わりました。

１日目の全体会では，基調報告に加え，「読むこと　書くこと　生きるということ」をテーマに愛媛県出身の３名の作家によるトークセッションが行われました。興味深いトークを通じてさまざまな分野でご活躍されている３名それぞれの視点からみた図書館への思いやつながり，今後の期待を知ることができ，貴重な機会となりました。

２日目の第２分科会は，「研究支援と図書館」というテーマで基調講演や事例報告，ディスカッションが行われました。大学における研究環境が日々変化している中で，大学図書館が担う研究支援の重要性や今後の可能性を改めて実感しました。

事例報告では，長年，大学図書館でレファレンス業務や教育活動に携わってこられた経験に基づく貴重なお話を伺うことができました。私自身，今年からレファレンスサービスや文献検索業務を担当し始めたばかりで，新たな発見や学びが多くありました。今後も知識を深め，経験を積んでいけるよう，精進したいと思います。

基調講演，事例報告後のディスカッションでは，さまざまな質問や意見が交わされました。現状だけではなく未来を見据えた意見が多く寄せられ，参加者の方々の図書館への強い思いを感じました。また，ディスカッションを通して図書館職員と研究者，双方の思いや意見を知ることができました。

愛媛の地で開催された全国大会に参加できたことは貴重な経験であり，大変光栄でした。大会のテーマ「図書館が　彩る未来　伊予路から」に込められているように，今大会を通して生まれた人々の図書館への思いが図書館の明るい未来へつながっていくと感じました。

今後も一図書館職員として，大会で得たものを大切にしながら日々の業務に丁寧に向き合っていきたいと思います。

（はなもと　わかな：
愛媛大学図書館医学部分館）

＊令和７年度（第111回）全国図書館大会愛媛大会ハイライト p.12-28

［NDC：010.6　BSH：全国図書館大会］

霞が関だより

▶第266回 ◉文部科学省

子供の読書活動優秀実践校・園・図書館・団体（個人）の取り組み事例について

文部科学省では，平成14年度から国民の間に広く子供の読書活動について関心と理解を深めるとともに，子供が積極的に読書活動を行う意欲を高める活動について優れた取り組みを行っている学校，園，図書館及び団体（個人）を表彰しています（園の表彰は令和６年度から）。

今回の取り組み事例紹介は，令和７年度子供の読書活動優秀実践園として表彰された「長浜市立長浜北幼稚園」（滋賀県）よりご寄稿いただきました。

「いごこちのよい　絵本の部屋づくり」

長浜市立長浜北幼稚園の概要

長浜市は，滋賀県の東北部に位置し，琵琶湖に面している市です。また，かつて，羽柴秀吉が初めて城持ち大名となって開いた城下町であり，江戸時代には，大通寺の門前町や北国街道の宿場としても栄え，現在でもその歴史的な町並みが残るなど，文化と自然に恵まれた地域です。

本園は，長浜市南側の住宅街に位置し，創立122周年の伝統と歴史のある幼稚園で，令和７年４月現在，５歳児13名，４歳児15名，３歳児６名が在籍しています。子どもの減少に加え保護者の就労等により，保育園や認定こども園の利用者が増加し，幼稚園は急激な園児数の減少がみられます。

小規模園となった現在，異年齢交流や近隣にある他園との交流を図ったり，いろいろな地域の人と関わったりすることで，経験の幅が広がることを願っています。また，園生活の中で成功体験や失敗体験といった直接体験を大切にした保育を心がけています。

１．絵本の部屋を大改造しよう

日々の園生活の中で，多くの人との出会いや関わり，さまざまな体験を大切にする保育を展開することと併せて，お話の世界に親しめるようにしたいという保育者の思いから，「薄暗い絵本の部屋をもっと明るくなるようにしてはどうだろう」「もっと居心地の良い環境に変えられないか？」という職員からの発信で，まずは「子どもたちがいつでも読みたい時に読みに行ける絵本の部屋」を目指し，職員作業で絵本の部屋の改造を行いました。

▲アイデアを出し合い，協力して改造中

▲手作り絵本ラック。間仕切りとして兼用

可動式の壁を取り払い，廊下と一体化した開放的な空間を作り，くすんでいた壁や棚をオフホワイトのペンキで塗り替え，絨毯をはがし木目の床を磨いて，明るくしました。また，落ち着いた雰囲気となるよう，壁や天井飾りに身近な自然物を取り入れ，園にある材料用具を利用して，温かみのあるナチュラルな雰囲気となるようにしました。さらに，家庭的な雰囲気でゆったりとくつろげるように幾つかビーズクッションを置き，子どもたちにとっても保護者にとっても「いごこちのよい絵本の部屋づくり」を心がけました。

既成の絵本棚には，シリーズものや季節感のあるもの，作家別などに分類して絵本を並べ，子どもたちが見つけやすく，また元に戻しやすくなるようにしました。併せて，すのこを利用した絵本ラックを間仕切りにして落ち着くことができる空間を作ったり，「今の季節」に合った絵本や，子どもたちが興味のある絵本，保育者がお勧めしたい絵本などが一目見て分かるように並べたりしました。この手作り絵本ラックは可動式なので衝立代わりにするなど，必要に応じて変えることができるのも便利です。

▲改造後の絵本の部屋

2．絵本の貸し出し

子どもたち自身が選ぶ絵本の貸し出しを週に１回（毎週木曜日）実施しています。

令和４年の夏に絵本の部屋を改造後は，保護者にも明るくなった絵本の部屋で，子どもたちに読んであげたい絵本を探してもらえるように「パパ・ママ絵本貸し出し」（毎回５冊まで）を実施しています。当初は，週に１回のペースで実施していましたが，借りられる保護者が固定しがちになったこともあり，広く利用してもらうことができるように令和６年度からは，保育参観時に親子で一緒に絵本を借りる「親子絵本貸し出し」（毎回５冊まで）も実施することにしました。参観時以外でも，降園時に絵本の部屋へ寄って，親子で借りられることもあり，自由な雰囲気の中で利用いただいています。

参観時の親子貸し出しの時は，どの絵本を借りるのか，親子でいろいろと会話をしながら，選ぶ姿が見られます。また，毎週子どもたちが借りてくる絵本に関心をもち「どんな絵本借りたの？」と声をかける保護者や，子どもから「今日，この絵本借りたよ」と見せるなど，絵本を通しての親子の会話が聞かれるほほえましい光景が見られます。帰宅した後，借りた絵本を一緒に見る時間が，親子の触れ合いの機会につながることを願っています。

▲親子絵本貸し出し「一緒に選ぶのは楽しいね」

▲参観時の親子絵本貸し出しの様子

3．地域のボランティアの方々との交流

本市には各小学校区に，「ジーバーぽこぽこ」という読み聞かせボランティアの団体があり，その学区の小学校や園に出向いて，読み聞かせをしておられます。実施回数はそれぞれの規模に応じて違いはありますが，本園は毎月１回，クラスごとに来ていただき，ボランティアさんが選んだ絵本を読み聞かせしてもらっています。園の先生とは違った人に読んでもらうことは，とても新鮮で，子どもたちの興味も増すようです。ボランティアさんは年齢層の幅が広く，読み手によって違う声色や読み方で読んでくださるので，知っているお話でもイメージが変わったり，よりおもしろくなったりします。また初めて聞く・知るお話に出会う機会にもなっています。わずかな時間ですが，子どもたちは毎回楽しみにしていて，いつも真剣に聴き入っています。

この他にも誕生会などの園行事には，地域のボランティアサークルの方に依頼して，“お楽しみ”と称してペープサートや指人形を使ってのお話や手遊び，大型絵本の読み聞かせなどの機会をもち，一緒に参加して楽しんでいます。子どもたちの知っている歌やお話などを取り入れながら，楽しい催しをしてくださるこの時間も良

▲ジーバーぽこぽこさんによる読み聞かせ

▲ボランティアサークルのみなさんによる催し

い機会となっています。

4．保育の中にもどんどん絵本を取り入れて，お話の世界とたくさん触れ合う保育の推進

保育の現場に，絵本は欠かせない物であり，大きな環境のひとつです。遊びの中には，生き物や自然物との出会いが年中あります。その中で，不思議なことや“なぜ？”と思うことがたびたび起こります。そんな時，発達年齢に応じた図鑑やそのことに関する絵本が身近にあることで，調べたり，比べたりすることができ，本から得た知識と実体験が結びつくことが多々あります。この結びつきが，子どもたちの興味や関心を高め，もっとやってみたい，もっと知りたいという意欲にもつながっています。そして，知り得たことを友だちや保育者と共有したり，また別の友だちや家族の人に伝えようとしたりすることで，言葉で伝え合う楽しさにつながっていくと思っています。また，ストーリー性のある絵本に触れることで，子どもたちは「お話の世界」を楽しむことができます。絵本のお話をクラスみんなで共有し，友だちと一緒にそのお話の役になって動いたり，同じような物を作ったりして遊んでいます。共有するもの（イメージ）があることで，子ども同士の関わりが増え，一緒に遊びを進める楽しさやおもしろさを経験しています。このような姿をクラスだよりで保護者に発信し，絵本が子どもたちにとって魅力ある教材であることを知らせています。また同時に，クラスで人気の絵本を紹介し，保護者へ絵本の啓発を行っています。

▲絵本の部屋で，先生の読み聞かせタイム

5．最後に…

近年，活字離れの傾向にあるということや，家庭で所有している絵本や本が少なくなっていることが課題となっています。子どもたちを取り巻くさまざまな状況を踏まえながら，園では，遊びや生活の中で絵本のお話の世界を楽しむことができる感性や，絵本を通して周囲のものごとに興味関心を持つきっかけ作りを心がけています。そして，子どもたちに新しい世界を紹介するひとつの手立てとして，今後も絵本を活用していきたいです。

▲保育室の中にある絵本コーナー

▲リラックスした雰囲気の中で，お話の世界へ

［NDC 10：019.53　BSH：絵本］

れふぁれんす三題噺　連載その三百二十六　松山市立中央図書館の巻

「知りたい！」に寄り添うレファレンスの現場

－豆苗から忍者，そして三津浜へ－

◆

小池ひろみ・河村好恵

春や昔十五万石の城下哉

俳人・正岡子規がそう詠んだ松山は，愛媛県の県庁所在地であり，中核市の一つです。温暖な気候と自然，山海の産物に恵まれ，松山平野の中心部に位置する松山城や，悠久の歴史を持つ道後温泉など名所旧跡が点在する当市は，子規の生誕地であり，司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』の登場人物たちにゆかりの深い土地としても知られ，文学やことばの文化を大切にする気風を育んできました。2025年10月には「第111回全国図書館大会愛媛大会」が開催され，県内外から多くの方々をお迎えしたのは記憶に新しいところです。

そんな松山市の市立図書館は，中央図書館と三津浜・北条・中島の地域館，そして市内168か所を巡回する移動図書館のネットワークで図書館サービスを進めています。このたび，中央図書館に「れふぁれんす三題噺」執筆の機会をいただき，担当者一同，大変光栄に思っています。大会の熱気を思い返しながら，最近寄せられた三つの事例をご紹介します。

その１

なぜ豆苗の子葉は種に残ったままで，本葉だけが伸びてくるのか？

台所で豆苗を栽培していた小学生からの質問でした。観察力の鋭い子どもの疑問に「え？そうだっけ？」，「そういえば豆苗のパック，双葉は見かけないかも」とあたふたする大人たち。同じマメ科の大豆は種皮を破って子葉が地上に出てくるのに，なぜ豆苗は違うのか？という点も気になるそうです。

自由研究の題材にしたいとのことなので，いつでも参照できる信頼のおける情報源を提供する必要があります。まず『植物の百科事典』（朝倉書店・2009）などの総合的な参考図書を見てみました。「地表性子葉」，「地下性子葉」という用語を発見し，特に「地下性子葉」をキーワードにインターネットを検索しました。ヒットしたページを見ていくうちに「植物形態学」という用語に行き当たり，「そうか！種子や発芽など，植物の形から研究する学問があるぞ」と蔵書検索に戻り，『植物形態の事典』（朝倉書店・1999）で内容を確認。豆苗はエンドウマメの若芽ですが，マメ科でもインゲンマメ，ダイズなどは子葉が地上に出るタイプ，エンドウマメ，アズキなどは子葉が地上に出ないタイプです。それは子葉が光合成の役割を担うのか，養分貯蔵の役割を果たすのか，で異なるようです。

回答は見えてきましたが，小学生に理解しやすい資料も提供したい。そこで，件名＝マメ科 and 資料形態区分＝児童書として蔵書を検索しました。見つかった資料のうち『くらべて発見タネの「いのち」』第２巻（農山漁村文化協会・2024）は求める条件に合い，喜んで借りていかれたので，対応した職員一同ホッとしたことでした。

台所で育つ豆苗が，植物形態学につながっていました。観察する力，なぜ？どうして？と問いを立てる力。対象年代や資料媒体にとらわれず調査することの大切さ。…そんなレファレンス調査のやり取りの原点を感じさせてくれた質問でした。

その２

ニンジャを探してどこまでも！海外からの調査依頼

海外の方から，翻訳ソフトを駆使したと思しき質問が寄せられました。「服部半蔵の子孫が松山藩松平家に仕えていたそうだが，そのことに関する資料はあるか」という内容です。

松山藩に関する調査依頼は多いものの，「服部半蔵」の子孫に関するレファレンスは当館の過去の記録にはありませんでした。郷土関係の質問でまず手に取る『松山市

史』全５巻（松山市役所・1992, 93, 95），『愛媛県百科大事典』上下巻（愛媛新聞社・1985）などにも情報は見つからず，インターネット検索と，歴代藩主の治世中の出来事を編年的に記述した『松山叢談』第一～四（今回は復刻版を使用／臨川書店・1983）とを併用して調査を進めました。

伊賀忍者と関わりの深い桑名市の公式サイトでは，忍者集団の頭領として有名であった初代服部半蔵の子らが松平家に仕え，分家に伴って松山，桑名，今治に従ったことが確認できました（https://www.city.kuwana.lg.jp/bunka/rekishibunkazai/kyoudoshi/jinbutsu/index.html）。

また，『松山叢談』第四に服部家の家譜があり，半蔵の子孫が松山藩にいたことが確認できました。ちなみに『松山叢談』から項目を探すときに重宝しているツールに愛媛県立図書館の「えひめ資料室　松山叢談」（人名索引，事項索引）があります（https://www.ehimetosyokan.jp/contents/ehime/m-soudan/m-soudan.htm）。

質問者にはこれらの調査結果をまとめて回答し一件落着…と思いきや，更に後日，当館の資料だけでは回答しきれないような，忍者の事績に関する質問が届きました。

その情熱に打たれながらも，この方が満足できる調査に対応できる類縁機関はないものか…と考えた末，思い当たったのが国立国会図書館の日本研究支援のページに案内のある，海外の方用レファレンスサービスです（https://www.ndl.go.jp/en/use/reference/index.html）。

当館で調査できた内容や，その他の情報へのリンクとともにこちらのページをご紹介したのですが，彼は今も元気に忍者の研究に取り組んでいるのでしょうか。

その３
あるファミリーヒストリー
～北海道から三津浜へ，祖父の足跡をたどる

時折，先祖探しに関するレファレンス依頼を受けることがあります。ご期待に添えない結果になることも多く，慎重に対応しなければならない種類の依頼ですが，具体的な資料が見つかった事例をご紹介します。

“父と祖父について調べたい。父は当時の三津濱町で出生し，祖父は外科医院を開業していたと聞いている。調査方法や，参考になる資料を教えてほしい”という依頼が北海道のお医者様から届きました。松山市の三津浜地区は，昭和15（1940）年に松山市に編入合併するまでは温泉郡三津濱町といい，松山の玄関口として栄えた歴史を持っています。大正13（1924）年には皇太子（のちの昭和天皇）のご成婚を記念し，「三津浜町営図書館」が県内の公の図書館としては最も早く開館しています。

さて，当時の開業医とあれば何らかの資料は見つかるのではと思われました。(1)明治・大正期の人名録，(2)三津浜図書館所蔵の郷土史・誌，(3)愛媛県の医師会誌，(4)学校医などもしていたかも？という発想から地元の学校の創立記念誌など，想定できるジャンルの資料をあたります。そして忘れてはならない国立国会図書館デジタルコレクション。データ送信館では約232万点を見ることができます（令和７（2025）年６月時点）。

調査の結果，人名録では『愛媛写真録』（神田秀一/編・発行・大正３（1914））などに氏名，肖像写真，経歴，病院の所在地などの情報を見つけることができました。 また，『愛媛県警察史』第１巻（愛媛県警察本部・1973）が検索でヒットしたため，何故？と思いながら該当箇所を確認したところ殺人事件の検視を行ったという記述が出て来て，「警察医でもあったのか！」と合点がいったという一幕もありました。全文検索の便利さを実感した瞬間でした。

質問者の方に回答をお送りしたところ，北海道から来松され，あらかじめお知らせしてあった資料や当時の三津浜町の地図などを三津浜図書館でご覧になり，御祖父様の医院があったと思われる町並を散策されたとのこと。北海道胆振国に生まれ，第二高等学校を経て京都帝国大学で医学を学んだ青年医師がどのような縁で三津浜の病院長となったのか？そこまでわかる資料は見つかりませんでしたが，「人に歴史あり」という言葉を思い出させてくれる調査となりました。

レファレンスは，既に知っていると思うような事柄でも新たな発見があったり，調査の過程で謎解きのようなスリルを感じたりと，その都度，新鮮な驚きがあります。この面白さを感じられるのがレファレンス業務の醍醐味。これからもさまざまなご質問に的確に答えられるよう研鑽を積み，利用者の皆様の「知りたい！調べたい！」に応え，その成果を新たなページに記していきたいと思います。

新年の白紙綴ちたる句帖哉　　子規

■「レファレンス協同データベース」松山市立中央図書館
https://crd.ndl.go.jp/reference/detail?page=pro_view&id=2310181

（こいけ　ひろみ：日本図書館協会認定司書第1227号，
松山市立中央図書館，かわむら　よしえ：松山市立中央図書館）

［NDC10：015.2　BSH：レファレンス　ワーク］

■図書館で実践！SDGs　第13回▶鹿角市立花輪図書館■

小さな図書館からの持続可能な発信

── 秋田県 SDGs パートナーとして ──

小林光代

鹿角市の概要

秋田県最北部に位置した鹿角市は人口３万人弱の地方都市です。この小さなまちに四つも世界遺産があり，市民の誇りになっています。どれも長い年月，住民によって大切に保存，維持されてきた「大日堂舞楽」，「花輪祭の屋台行事」，「毛馬内の盆踊」，「大湯環状列石」です。

四つの世界遺産　左上：世界文化遺産「大湯環状列石」（北海道・北東北の縄文遺跡群）／右上：無形文化遺産「大日堂舞楽」／左下：無形文化遺産「花輪祭の屋台行事」（山・鉾・屋台行事）／右下：無形文化遺産「毛馬内の盆踊」（風流踊）

写真提供：鹿角市

また，近くに十和田八幡平国立公園があり，自然豊かな地として多くの観光客が訪れています。

歴史を遡ると，江戸時代は南部藩（岩手県）だったことから当館所蔵の図書資料には岩手県のものも多くあります。このような周辺環境のなかで，花輪図書館は十年前に文化ホール，市民センター，子ども未来センターの４団体が入る複合施設“文化の杜交流館コモッセ”として建てられました。２階にある図書館は面積1,100㎡ほどの小規模ながら活動的な場として市民に親しまれています。

はじめに

市の図書館運営方針には，(1)地域文化の継承と産業育成の支援，(2)レファレンスサービスの充実，(3)子どもたちの読書環境の充実，(4)図書館サービスの向上が掲げられており，2015年４月からは指定管理を導入して(株)リブネットによって運営されています。

現場を担う私たちは，上記を踏まえ多くの方々へ利用を促すために日頃から「つなぐ」をテーマにし，まずは図書館へ来てもらうためのきっかけづくりに工夫を凝らしています。複合施設という条件を活かし，本と図書館という場を通して地域の人たちとつながっていくことを意識した発信型展示や多種多様な連携型イベントの開催は当館の特徴のひとつになっています。SDGsの取り組みもこうした考えの延長から誕生しています。

秋田県 SDGs パートナー登録制度

2021（令和３）年９月，秋田県では県独自の制度として〈秋田県SDGsパートナー登録制度〉を創設しました。事業活動を通じてSDGs（持続可能な開発目標）の達成に意欲的に取り組む県内企業，団体，自治体等の登録を図り，PRすることを目的としています。さらには，それぞれの団体でのSDGsへの取り組みを見える化し，その裾野を広げるため，積極的な参加を呼びかけ，現在，第19期の募集中です（2025年12月１日～2026年２月28日）。

当館では第５期から参加していますが，図書館の登録は珍しいかと思われます。実際，登録者の一覧を見ると，企業や自主団体が多く，その活動は具体的に示されています。例えば，ごみを少なくするための回収活動とか，ものを大切にするリサイクル活動とか，自然を守る保護活動など。その点，図書館ではどんな取り組みができ，実行できるのかが問われます。

図書館でなければできないSDGs

私たちは，図書館だからできることとして取り組み方針と目指す姿を次のようにまとめました。

①図書館資料を通し多くの市民へ17の目標の理解と啓発の継続的な推進に努める。

②自館のテーマ展示や図書館イベント事業で幼児から高齢者まで分かりやすい資料の展示と，身体的理由等によって図書館利用に不自由を感じる方への配慮をし，誰もが等しく生涯学習を享受できる環境をつくる。

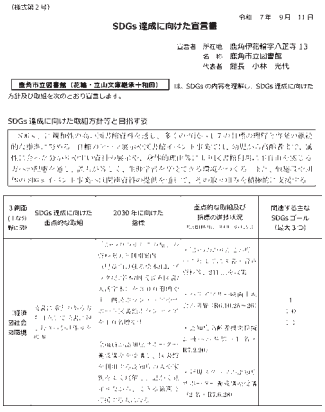
③他施設や団体のSDGsイベント事業への関連資料の提供を通してその取り組みを積極的に支援する。

そして，県と交わす「宣言書」に記入する〈重点的な取り組み及び指標の進捗〉ならびに〈各目標に関連する主なSDGsゴール〉は以下としました。

【目標４】質の高い教育をみんなに，【目標８】働きがいも経済成長も，【目標10】人や国の不平等をなくそう，【目標11】住み続けられるまちづくりを，【目標12】つくる責任　つかう責任，【目標15】陸の豊かさも守ろう，【目標16】平和と公正をすべての人に，【目標17】パートナーシップで目標を達成しよう。

です。

加えて，高齢者の多い土地柄もあり，SDGsという言葉さえ聞いたことのない人もいるのが現状でしたから，SDGsとはなにか。いったいどんなことができるのか。それがどのように大切なものか。どうして必要なのか。といった基本的なことを日ごろより図書館から情報発信していくことにも努めることとしました。



（様式第２号）

令和　７年　９月　11日

SDGs 達成に向けた宣言書

宣言者　所在地　由利本荘市水林字八正寺 13
名　称　由利本荘市立図書館
代表者　館長　小林　光代

由利本荘市立図書館（花輪・鳥海文庫館等十箇所）は、SDGsの内容を理解し、SDGs達成に向けたお計及び取組を次のとおり宣言します。

SDGs達成に向けた取組方針等と目指す姿

3側面（1つ以上）に対応	SDGs達成に向けた重点的な取組	2030年に向けた目標	重点的な取組及び指標の選択状況（○は指標No.、××は××%）	関連する主なSDGsゴール（1つ以上）
経済 社会 環境	多様な考え方を受け入れ、持続可能な社会を創るための知識、インスピレーションを与えるとともに、学習機会を提供する場所	・ ・ ・	・ ・ ・	4 8 11
経済 社会 環境	文書館の収蔵資料を通じて、持続可能な社会を創るための知識、インスピレーションを与えるとともに、学習機会を提供する場所	・ ・ ・	・ ・ ・	4 8 11

具体的な取り組みからいくつか紹介します。

・「りんごの棚」コーナーの設置

2019年に成立した読書バリアフリー法への対応とも重なる取り組みです。読書が難しい読書弱者向けに点字図書や触って感触を確かめられる布絵本などを並べる「りんごの棚」コーナーを設置しました。「りんごの棚」は1993年にスウェーデンで始まり各国に広がりましたが，秋田県では当館が最初となり手探り状態でのスタートでした。設置にあたってはスウェーデンの図書館と交流の深い日本障害者リハビリテーション協会（東京）のお力をお借りして，「りんごの棚」の名称とオリジナルロゴの使用許可をとりました。これまでに点字図書，布絵本，音声資料等211点を収集。学校からの見学来館の際には，必ず立ち止まり，丁寧に説明を加える場所となっています。

りんごの棚

・「バリアフリー映画上映会」の開催

文化ホールの入った複合施設のメリットを活かし，年に数回，字幕付きのバリアフリー映画の無料上映会を行っています。会場には必ず関連本を飾り，貸し出しや図書館利用につなげるよう工夫しています。映画館のないまちでもあることから大きなスクリーンでゆっくり映画鑑賞できる機会は市民に喜ばれ，たいへん好評です。

・「認知症高齢者等捜索模擬訓練」への参加

当館職員は全員が市で実施している「認知症サ

ポーター養成講座」を受講，終了し，利用者に向き合っています。高齢化が顕著な地域での助け合いは公共施設でできる大きな役割と考えています。来館者や移動図書館車のステーション先での行き届いたサポートを心掛け，“鹿角市見守りネットワーク協定”施設としても登録。“あんしん長寿課”“社会福祉協議会”等々，広域にわたり各部局との情報共有にも努めています。

・「ブックリスト」の作成と展示

１階ギャラリースペースを借り，広く市民の皆さんにSDGsを理解してもらうことを念頭に，それまで既に図書館資料を使って勉強会をしていた団体〈鹿角子どもSDGs〉や，未利用の山を借り受けてマキを確保し，木の玩具づくりなどの活動をしている協同組織〈MAKIKORI〉などと連携した展示を実施。各団体の活動紹介を行い，併せて，図書館作成のSDGsに関連した本を紹介した「ブックリスト」を配布しました。

ブックリスト・ギャラリー展

ブックリスト

なかでも〈鹿角子どもSDGs〉の子どもたちが制作した世界のエネルギーなどに関した新聞は反響が大きく，手ごたえを感じるものでした。

〈鹿角子どもSDGs〉とともに

〈鹿角子どもSDGs〉は，図書館に先んじて，秋田県SDGsパートナーに登録していました。これまで図書館の資料を用いて，図書館と協働で活動を続けている団体で，現在，メンバーは小学生５名，中学生４名。

①鹿角子どもSDGs市日の開催と募金活動
②鹿角子どもSDGs新聞の発刊
③鹿角子どもSDGsファーストエイドの開催

を軸にして行っています。

月１回発行の新聞づくりに関しては図書館と最も深い関わりを持って実施されているものです。

〈鹿角子どもSDGs〉新聞

〈鹿角子どもSDGs〉の活動の様子

今後に寄せて

2015年９月にSDGsの運動が発表されて以来，17項目の目標へ向かって具体的取り組みがいろいろな形で進められています。目標達成の2030年は随分遠いところにある感覚でしたが，気が付けば後５年。しかし，当然ながら2030年がきたからといって取り組みが終了するわけではありません。持続可能な開発目標に近づけるために図書館として何ができるかを常に問い続け，今，地球に起きていることを他人ごととせず自分ごととし，世界中の情報を入手できる図書館だからこそアンテナを高くしつつ，より正しい情報を的確に届ける使命を私たち図書館員は負っているように思います。

登録証最新版

（こばやし　みつよ：鹿角市立花輪図書館）
［NDC10：016.2124　BSH：鹿角市立花輪図書館］

小規模図書館奮戦記 その323 上田短期大学附属図書館

新たな図書館づくりに向けて再始動！

玉岡兼治

Restart

上田短期大学附属図書館は，戦国時代の武将，真田幸村で知られる上田城のある上田市から信州最古の温泉・別所温泉へ行く電車で15分ほど行った塩田平の端に所在します。

本学は，2023年に創立50周年を迎えました。長らく地元の方々からは上田女子短期大学として，「うえじょ」の名前で親しまれてきましたが，2025年４月から男女共学となり，校名も「上田短期大学」に変わりました。私たち上田短期大学の教職員にとっては単なる校名の変更ではなく，新しい大学を創る，「Restart」と位置づけ，動きはじめているところです。

上田短期大学は幼児教育学科と，総合文化学科の２学科体制です。また総合文化学科には司書課程があります。

附属図書館の2025年３月末現在蔵書冊数は88,214冊，昨年度の年間利用者は，本学学生，教職員を中心に17,769人となっています。

隣接して上田短期大学附属幼稚園があり，幼稚園児が短大キャンパスを訪れては，キャンパス裏山での自然観察や幼児教育学科が行う行事に参加するなど，キャンパス内にしばしば園児が訪問している風景は本学ならではの風景と言えるでしょう。

学生による図書館プロジェクト始動

今年は大学もですが，図書館関係もスタッフが全く新しくなりました。図書館長，館員，司書課程担当教員もすべて交替となりました。

このような中で，新館長から「図書館を学生のみんなの力で盛り上げて，大学の中心的存在にしよう」という提案がなされ，スタッフ募集を行いました。全学から図書館好きな学生が集まってくれ，こうした学生を中心に「図書館プロジェクト」が発進することになりました。

活動は毎週木曜日昼休みに図書館１階のブラウジングスペースに集まり，活動計画などについて意見を話し合ったり，イベント開催の計画を立てています。

今までの活動としてはオープンキャンパス時に来館した高校生のみなさんに図書館をよく知ってもらうためのイベントを開催したり，所蔵図書のPOP作りをしています。

2025年11月13日は上田市にある古書店「バリューブックス」の方に来ていただき，コラボ企画ができないかという話し合いをしました。また近く学生メンバーがバリューブックスに行き，ブックハンティングを行うというイベントも開催する予定です。

地域との連携をはかる図書館

先に述べた図書館プロジェクトの地元企業とのコラボ企画もそうですが，本学図書館では地域に根ざした図書館づくりを行っています。

昨年11月１日には図書館講座として「どうしていますか？　図書館での学習支援」というテーマで講習会を開催しました。当日は公立，高校，大学とさまざまな館種の図書館員の方にお越しいただき，それぞれの館での学習支援についての話し合いや改善策の提示などが活発に話し合われ，予定時間を大幅に超える有意義な時間となりました。それから「おやことしょかんBiv」も開催し，地域の子どもたちやその家族のみなさんに図書館の絵本や児童書を活用していただいています。

また本学図書館では広報活動にも力を入れています。図書館で行っているさまざまなイベントのようすや図書館とも密接に連携している司書課程の授業の一コマも含めて上田短期大学を広く知ってもらうことを心がけています。

こうした活動はまだ始まったばかりですが，学内外の方々の協力も得ながら，よりよい「うえたん図書館」を創っていこうと思っているところです。

（たまおか　けんじ：上田短期大学）

［NDC10：017.8
BSH：上田短期大学附属図書館］

ウチの図書館 お宝紹介! 第255回 千葉大学附属図書館亥鼻分館

亥鼻分館所蔵「古医書コレクション」

―江戸時代から明治初期の医学資料―

米田奈穂

1．はじめに

千葉大学は，1949年に，当時千葉県内にあった複数の旧制国立学校を統合して誕生した総合大学です。現在では西千葉，亥鼻（いのはな），松戸，柏の葉，墨田の五つのキャンパスを有しています。

附属図書館は，西千葉地区の本館，亥鼻地区の亥鼻分館，松戸地区の松戸分館の３館で構成されており，それぞれのキャンパスの特色に応じた資料提供とサービスを行っています。中でも亥鼻分館は，医学部・薬学部・看護学部などが集まる亥鼻地区に位置し，生命科学分野に特化した専門図書館として，教育・研究活動を支えています。

亥鼻分館の歴史は古く，1926年に設置された千葉医科大学附属図書館にその起源を持ちます。千葉大学の発足に伴い1949年に「医学部分館」と改称され，1978年には亥鼻地区の４部局を支える複合分館として再編され，現在の「亥鼻分館」となりました。

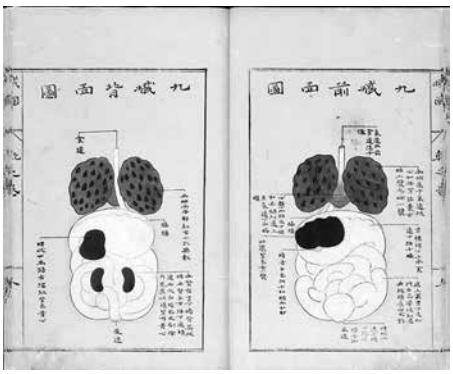
今回のお宝紹介では，千葉大学附属図書館が所蔵するいくつかの貴重書コレクションのうち，亥鼻分館が所蔵する「古医書コレクション」をご紹介いたします。

2．亥鼻分館古医書コレクションについて

千葉大学附属図書館亥鼻分館が所蔵する「古医書コレクション」は，江戸時代から明治時代初期にかけて出版・書写された資料群で，5,500冊ほどから成ります。内容は，中国（清時代）の舶載本，江戸幕府による刊行医書，漢方医学書，民間療法や習俗に関する医療書，本草学関連資料，蘭学書，洋方・蘭方医学書，法医学書，和方医学書などに分類することができます。

このコレクションの中心となっているのは，千葉大学名誉教授・伊東彌恵治氏が，大正末期から昭和20年代にかけて医学史研究のために収集した古医書です。加えて，千葉県茂原市で代々眼科医を営んでいた千葉家の旧蔵書，蘭医学塾兼診療所として佐倉順天堂を創設した佐藤家の旧蔵書，幕末の医家・三宅春齢の著作を含む三宅家の旧蔵書などが含まれています。

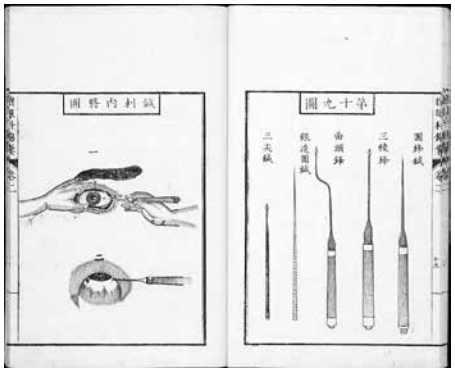
3．資料の紹介



▲『蔵志（全）』山脇東洋
https://opac.ll.chiba-u.jp/da/koisho/1352/

著者の山脇東洋は，江戸中期の医者で古医方の大家です。従来からの「五臓六腑説」が正しいかどうかを人体解剖により実際に検証したいと考え，京都所司代酒井讃岐守に申し出て，宝暦４（1754）

年にわが国で最初の解剖を行いました。本書はそれを基にしたもので，人体解剖，観臓図誌の始まりと言われています。



▲『眼科錦嚢（天，地，玄，黄・上，下）』本庄晋一
https://opac.ll.chiba-u.jp/da/koisho/394/

江戸時代末期の漢蘭折衷眼科書の，最も詳しいものと評価されています。著者の本庄晋一は長崎に遊学した後，武蔵国川越で開業しました。全６冊の中で，目の見えるわけ，眼病に用いる薬物，眼病，治法を示し，後巻の上では眼科に関するエッセイを，下では本庄氏が治療に用いた眼科治療器具を紹介しています。

▲『流行麻疹けん』（芳艶）
https://opac.ll.chiba-u.jp/da/koisho/2220/

江戸時代，麻疹（はしか）が流行した際には，浮世絵師によって多くの錦絵が作成され，これらは「はしか絵」と呼ばれました。この作品は，芳艶によるじゃんけん遊びの錦絵とともに，はしかにかかったときの自己診断法，食べると良い物，食べてはいけない物がわかりやすくまとめられています。

４．おわりに―デジタルコレクションの楽しみ

今回ご紹介した「古医書コレクション」の目録および解説は，「千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション目録」として，Web上で公開されています。また，コレクションのうち約1,780点については，千葉大学医学部同窓会の支援と，国文学研究資料館による「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」に基づき，「千葉大学学術リソースコレクション　c-arc」から画像データを閲覧・利用することが可能です。これらの画像データは，International Image Interoperability Framework（IIIF）という技術を活用して提供されており，学術リソースとして簡便に利活用できる環境が整えられています。研究や学習はもちろん，趣味や教養の一環としても，ぜひご活用いただければ幸いです。

「古医書コレクション」には，歴史的に貴重な資料が多数含まれており，当時の医学者がどのような知識を持ち，どのように学んでいたのかを今に伝える貴重な手がかりともなっています。医学の進展だけでなく，当時の「暮らし」に密接に関わる資料も含まれていますので，幅広い知識を得ることもできるでしょう。

専門的な資料だけでなく，江戸時代に流行した黄表紙のように，絵と文字でわかりやすく表現された資料も多く収録されています。まずは，デジタル化されたコレクションを気軽にご覧いただき，古医書の世界をお楽しみください。

■千葉大学附属図書館亥鼻分館古医書コレクション目録
https://opac.ll.chiba-u.jp/da/koisho/
■千葉大学学術リソースコレクション　c-arc
https://alc.chiba-u.jp/c-arc/
■参考資料
・千葉彌幸「千葉大学の医学古書と眼科史」（『千葉医学雑誌』73(1)，p.33-37，1997）
・樋口誠太郎「千葉大学図書館亥鼻分館蔵医学古書コレクションの内容」（『千葉医学雑誌』75(2)，p.91-95，1999）

（よねだ　なほ：千葉大学附属図書館亥鼻分館）

［NDC10：090　BSH：1. 稀書　2. 千葉大学附属図書館亥鼻分館］

図書館員のおすすめ本⑩⑨

かずをはぐくむ

森田真生著　西淑絵　福音館書店　2025　¥1,800（税別）

本を閉じて，ゆっくりと目の前の景色をまなざす。世界が，うららかになってゆく。

本書は，数学をテーマに活動する独立研究者である筆者が，雑誌『母の友』に五年間連載した記事をまとめた一冊である。

筆者が初めて腕に抱いた，生まれたばかりの息子には，言葉も概念もなかった。それでも，幼い兄弟が成長していくにつれて，彼らの心の内にはゆっくりと「数」が育まれていく。「数のない世界から，数にいろどられた世界へ」（p.5）。そのたった一度きりの歩みの中で，子どもたちはこの世界に満ちる不思議と美しさに，ひとつひとつ新鮮に驚き続ける。そして，その隣を歩く私たち大人もまた，世界と新たに巡り合う。置き去りになっていた世界の不思議，美しい問いが，今もう一度息を吹き返す。０（無）から１（有）が生まれ得たことの不思議，２，３，４…と瞬間を積み重ねた彼方に広がる無限大（永遠）の果てしなさ，人の命では決して届かないはずの永遠が，実はあらゆる一瞬の中に含まれていること。大人になって気付くその秘密とともに，小さな人の手を引きながら再び歩むその道の，どの瞬間もがあまやかで，私はこの本をほとんど詩集のように読んだ。

「つかのまの永遠」と題された章で，筆者はこう綴る。「数学とは，概念を揺さぶり，創造していく学問である。（中略）規則通りに計算するだけの機械より，新たな概念が芽生える瞬間に立ち会える物語の方が，数学に近いのではないかと思った」（p.50-51）。そして，従甥へのプレゼントに電卓ではなく，『ぼくがゆびをぱちんとならして，きみがおとなになるまえの詩集』（斉藤倫著　高野文子画　福音館書店　2019）を選ぶ。子どもがあっという間に大人になってしまう，その一瞬の輝きの中に永遠を願った物語である。数学も，詩や物語，絵画や音楽などと同様に，世界を表現し，美しく祈るためのひとつの手段であろう。

（内山紗也香（うちやまさやか）：鹿嶋市立大同東小学校図書館）

人はなぜ物語を求めるのか

千野帽子著　筑摩書房（ちくまプリマー新書）　2017　¥900（税別）

例えば，電車が遅延して大事な約束に遅刻したり，仕事で理不尽な叱責を受けたり，嫌な仕事を押しつけられたり…。こんな不運が続くと，人は「何で私ばかりこんな目に」と考える。人間には，起こったことの原因を知りたいという衝動があると著者はいう。「なぜ」がわからないと，落ち着かない生き物であるらしい。

そして求める原因は，自分にとって納得できるか否かが問題であって，正しいか否かは関係ない。納得するには，その説明が自分の中にある一般論に合致していることが必要となる。原因と結果の因果関係が自分の物語と合致すれば，「わかった」と認識し，人は安心する。この特性が，非常時…例えばコロナ禍などでどのような混乱を巻き起こしたかは記憶に新しい。自分の物語にあてはめようと，「べき論」を主張してトラブルになることもある。納得できない側面にだけ焦点をあてて，生きづらさを抱えてしまう人も多くいる。

物語の生成を人が当たり前に持つ衝動だとするならば，どうすればこのようなリスクを回避できるのだろうか。著者は，「無自覚なストーリー作りをやめる」（p.107）で，ずいぶん楽になるという。世の中には、因果律的に説明できないことがたくさんある。自分の中の物語を見直したり手放したりする自由は常にあることを知ればよいのだと。この本は，NDCでは９類に分類されているが，人間学または哲学・心理学の要素が強い。巻末には丁寧なブックリストがついている。

人は常に，何かしらの問いを抱えて生きている。飛びついた答えがフェイクで苦しむこともあるが，見つけた答えに救われることもある。私たち司書の仕事は，人が求める物語に対して，よりよく生きられる答えをつなげることができるものなのかもしれない。人生の早いうちに出会ってほしい本の一冊である。

（笹川美季（ささかわみき）：清瀬市立図書館指定管理館準備室，日本図書館協会認定司書第2012号）

図書館員のおすすめ本⑩⑨

日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか

内山節著　講談社（講談社現代新書）　2007　¥840（税別）

タイトルを見て民俗学の本だと思う人もいるかもしれない。私もそうだった。でも，まえがきの中で著者も述べているように，本書は歴史とは何かを問う「歴史哲学序説」として書かれたものであり，「キツネにだまされること」を条件反射的に「民俗学」の範疇のものだと思うことそのものに対しても，その意味を鋭く問う一冊である。

著者は，滞在した各地の山村で聞いた，キツネに人がだまされた話のいずれもが，1965年以前の話であることに気づく。なぜ1965年以降，キツネに人はだまされなくなったのか？

人やキツネ，森など，1965年を境として変化したものを挙げながら，著者はその要因について考える。それらは「環境の変化」というありきたりな結論に集約されそうにも見えるが，そこに「本当にキツネは人をだますのか」というそもそもの問いが置かれることで，さらに深いテーマへとつながっていく。

現代の私たちは知性に照らして合理性のあるもののみを歴史として認知している，と著者は指摘する。しかしそれが歴史のすべてではないのではないか，知性だけではつかみ取れない「見えない歴史」と私たちとの間に大きな乖離が生じているのではないか，と。確かに合理性の有無のみで歴史を捉えるなら，そこにはキツネに人がだまされる余地などないだろう。

1965年から60年，本書が世に出てからも20年近くが経過した。SNSや生成AIの進化など，私たちを取り巻く情報社会は複雑多様化し，混沌とした様相を呈している。そんな中，本書が提起するものとはまったく違うベクトルでの，知性を軽んずる，反知性主義とでもいうべき動きも見られる。落ち着いて自分の立っている場所を見極めることの大切さが痛感される現在，本書の私たちへの問いかけは，より重みを増しているように思えてならない。

（渡邊哲哉（わたなべてつや）：高知県立図書館）

コスタリカ　「純粋な人生」と言いあう平和・環境・人権の先進国

伊藤千尋著　高文研　2023　¥1,800（税別）

中米に位置するコスタリカは，軍隊を持たない小国として知られている。日本も憲法九条を持つ国として同じ方向を目指していることは，日本に住む人ならだれもが承知のことであろう。しかし，コスタリカと日本は，だいぶ違う国になっている。どこが違うのだろうか。この本はその回答の一端である。著者はフリーの国際ジャーナリスト。元朝日新聞の中南米特派員としてこの地域を飛び回って取材をしていた。

「軍隊を持つことが当たり前，という考えを捨てることだ。」（p.3）と冒頭から述べて，コスタリカについての紹介を始めている。「平和を考えるときも，日本ではすぐに国家や世界の平和を頭に浮かべがち」（p.5）だが，コスタリカは違っている。個人が平和のおおもとにあり，「自分との平和，他人との平和，自然との平和」（p.5）を大切にしている。それが平和，人権，環境を大事にする社会の土台ともつながっている。

常設の軍隊を持たないと憲法で決めたのは1949年のこと。軍隊を持たないことで国家予算の３割を占めていた額をそのまま教育費にあてることができた。福祉，医療にも回した。夢のような話だが本当のことである。こうして開発途上国なのに北欧と並ぶ教育，福祉国家が実現した。

コスタリカはお金を持っていない。南米からの麻薬のルートにもなっていて問題は山積である。でも平和，環境，人権という基礎的なありようが人々に浸透している。世界に通じる平和国家の作り方を知っている。だから小国でも胸を張って頑張れるのだ。副題の「純粋な人生」は，「プーラ・ビーダ」というあいさつ語を訳したもの。「何でもないさ」という意味らしい。この国を象徴している言葉なのかもしれない。

（大塚敏高（おおつかとしたか）：元神奈川県立図書館）

［NDC10：019.9　BSH：書評］

報告　非正規雇用職員セミナー（福岡）「見えてきた“現場のリアル”ー学校図書館と非正規雇用をめぐる課題ー」報告

山口真也

◆学校図書館における雇用の問題を考える

2025年９月23日，福岡県立図書館地下１階レクチャールームにおいて，日本図書館協会（以下，JLA）非正規雇用職員に関する委員会と九州地区非正規雇用職員セミナー実行委員会が主催するセミナーが開催され，九州各県から，34名の参加がありました。会計年度任用職員として働く現職者はもちろん，大学生や研究者，市民，学校図書館OBの方までさまざまな立場の人たちが集いました。

◆報告「学校司書配置の課題とは？　各種調査の結果から」

はじめに，JLA学校図書館部会選出理事であり，非正規雇用職員に関する委員会の委員も務める高橋恵美子さんから，「学校司書配置の課題とは？－各種調査の結果から」と題する報告がありました。この報告では，1990年代以降の学校司書の配置状況の変化として，『ぱっちわーく』や「学校図書館を考える会・近畿」といった運動の動きを紹介しながら，2014年の学校図書館法改正（学校司書法制化）の影響により，「複数校勤務」という形で「薄く広く」学校司書の配置が進んでしまったことについての問題意識が示されました。その上で，文部科学省（以下，文科省）による「令和５年度公立学校における学校司書の配置状況に関する調査」と，JLAによる「学校図書館職員雇用状況調査（自治体向け）」「学校図書館職員に関する実態調査（個人向け）」の詳細な紹介，および，学校司書配置についての提言がなされました。文科省の調査は，2020年度以前も定期的に実施されてきましたが，正規職員や学校司書の実数が示されず，法律上の「学校司書」以外の職員（業務委託・派遣，有償ボランティア）の把握もできない不十分な調査となっていました。令和５年度の調査は，学校司書の実数や複数校兼務の実態なども示され，よりリアルな実態を読み取ることができるようになっています。

高橋さんの報告では，文科省の調査とJLAの調査の結果を比較しながら，非正規雇用が依然として多数を占める状況にあっては，図書館活動が学校教育の中に十分に定着することが難しい状況にあること，そして，「いてもいなくてもいい立場」「やりがい搾取」といった，疎外感や孤独感，絶望感，限界を感じるといった声が複数校兼務の人から多く寄せられていることが明らかにされ，①すべての学校にフルタイムで１校専任の学校司書を配置すること，②学校司書を学校教育に関わる職員の一員として処遇すること，③公的な研修制度を制度化し，学校司書の資質向上を保障すること，その法的な根拠として，④学校司書の法的位置づけを明確にするための学校図書館法の条文改正を行うことなどが提言されました。提言内容については，2025年９月14日に非正規雇用職員に関する委員会と学校図書館部会の連名で発表された「学校司書の配置・処遇等について（見解）」（https://www.jla.or.jp/wp/wp-content/uploads/2025/09/sl_kenkai.pdf）でも詳しく解説されていますのでぜひご覧ください。

◆九州各地での事例について

事例発表では，熊本県・福岡県・長崎県の小中学校に勤務する会計年度任用職員の方々からの３本のリポートがありました。セミナーの性質上，

発表者名や自治体名はここでは伏せさせていただきますが，各地のリポートからも，高橋さんの提言に共通する課題がいくつか浮かび上がりました。例えば，学校司書として専門性を高めるために年間テーマを設定して専門的な研修に日々励んではいるものの，学校内ではまだまだ子どもたちの教育に関わる専門的な職種として認められておらず，司書教諭は「名前だけ」で，関わりもあまりなく，職員会議に参加できず，タブレットも支給されないため子どもたちの情報が分からない，といった問題点が挙げられました。また，他の業務との兼務やパートタイム勤務では十分なサービスができず，仕事を自宅に持ち帰ることも多い，という実情も見られます。ある自治体では，勤務時間の延長を求めて，せめて１時間長く，６時間勤務になるように，長い期間をかけて，市民の声も届けながら自治体当局への働きかけを続けてきたのに，最終段階で，その自治体の学校司書全員にアンケートを取ったところ，「５時間がよい」「５時間で十分」「６時間は困る」という回答が多数を占めたため，結果的に振り出しに戻ってしまう，という出来事があったそうです。報告者曰く「そもそも５時間勤務を条件に募集しているのだから，５時間の人（５時間がよい人）が来るのは当たり前」です。学校図書館の雇用問題を解決するためには，「制度が先か，成果が先か」ということがしばしば問われます。優れた実践を通して，成果をアピールし，よりよい雇用条件を勝ち取っていこうという考え方もあるかもしれませんが，制度が整えられなければ，事態は動かないということも改めて実感しました。

リポートの中では，高橋さんの提言に対して，「私自身はフルタイムは望まない」「毎日学校にいる人よりも時々来る人の方が子どもたちは心を開いてくれることもある」「複数校兼務だからこそできることもあるのではないか？」という意見も寄せられました。各地からのリポート後に予定されていた「トークタイム」の時間が短く，この発言について議論を深められなかった点は残念でしたが，学校司書の雇用をめぐる，過去から現在までの複層的な状況を背景とした“現場のリアル”がまさに垣間見られたようにも感じました。

本セミナーに先立って，８月の中頃，私が住む沖縄県のある自治体において会計年度任用職員として働く小中学校の学校司書の方々へのアンケート調査と意見交換を行う機会がありました。沖縄県は小中学校も含めて，高橋さんの提言にあるような，＜１校専任・フルタイム＞での学校司書の配置が早い時期から進み，正規職員も多く配置されていましたが，学校図書館法改正による司書教諭の配置義務化以降，2000年代に入って正規職員の配置率は急速に低下してしまいました。県立高校については2011年度に正規化の方針転換が行われ，少しずつ正規職員の比率が高まってきていますが，市町村の小中学校では現在も正規職員の減少傾向は続いてしまっています。沖縄県内の学校図書館で働く非正規職員を対象としたアンケート調査は約20年前にも実施したことがあるのですが，そのときは，“同じ仕事をしているのに正規職員と待遇が違いすぎる”という不満や，“正規職員として働きたい”という希望が多く寄せられていました。しかしながら，今夏の調査・意見交換では，会計年度任用職員制度がスタートしたことで，フルタイムからパートタイム勤務に切り替わり，雇用時間が短くなってはいるものの，報酬自体はアップしているためか，以前のような条件面での不満はほとんど聞かれませんでした。学校図書館での非正規雇用が“当たり前”となることで，正規職員との格差も徐々に見えづらくなり，雇用の問題が潜在化してしまう怖さも感じています。

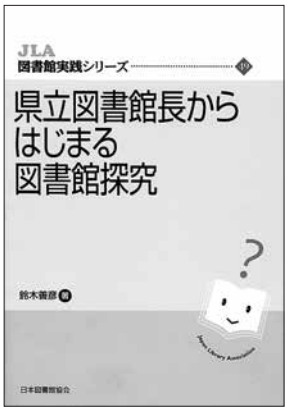
◆課題を共有して，学びを深めよう

セミナー終了後には参加者から，「今回のセミナーで日本図書館協会が学校司書のことも非正規職員のことも大切に思ってくれていることを心強く感じました」「他県の状況を知ることで目の前の問題に気づくことができました」「各地の状況を知ることはできましたが，今後どうすればいいのか，未来に向けた話ももっと聞きたかったです」といった声が寄せられました。学校図書館の雇用問題は地域ごとに事情が異なり，一律に議論するのは難しい面もありますが，今後も，こうしたセミナーを通して各地の課題を共有し，解決に向けて学びを深めていきたいと考えています。最後に，会場をご提供いただいた福岡県立図書館の皆様，開催に向けて準備にご協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

（やまぐち　しんや：沖縄国際大学，
九州地区非正規雇用職員セミナー実行委員）

［NDC 10：017　BSH：1. 学校図書館　2. 図書館員］

図書館員の本棚



県立図書館長からはじまる図書館探究

鈴木善彦著
東京　：　日本図書館協会
2025.　viii，176p　：　19cm
（JLA図書館実践シリーズ；49）
ISBN　：　978-4-8204-2414-7　：　¥1,800（税別）
NDC10：016.2154
BSH：図書館（公共）－静岡県

鈴木善彦氏は，高校や県教育委員会に勤務後，県立図書館長に就任され，在職中には司書資格を取得されている。この実践記は，外部から館長になった視点から，職員とともに活動に真摯に取り組み，さまざまな気づきや発見，自らの思いや考えを率直に語ることで，県立図書館とは一体何をしているところなのかを図書館探究として描くことに成功している。どこから読んでも楽しく，読後感がさわやかなのは，教諭の経験から，人の成長の支援をあたたかなまなざしで見つめ，わかりやすくまとめて伝える技によると思う。県立図書館組織の中で，現状と課題をきちんと捉え，職員に聴き，図書館学に学び，図書館協議会で委員と話し合うとともに，解決に向けて職員とともに前を向き，励まし合い，学びながら歩む過程がとてもすてきだ。さまざまな危機に直面しながら思案し，「開かれた，信頼される，成長し続ける図書館」を基本理念に掲げ，計画的な改革に着手して，職員参加による不断の改善・改革推進に取り組み，苦難をも成長の糧として歩んできた。「館長は絶えず課題や問題を見逃さず，それを職員と共有する」（p.100）ことや，「館長は職員の創意と意欲を結集して目的に導くリーダーでありたい」（p.100-101）と記している。

また，職員とともに市町村立図書館を訪問し，住民が図書館で本に接する姿に出会い，それぞれの土地の事情に根ざしたさまざまな利用サービスや資料収集がどういうものかに開眼して，「図書館とは存在する地域，そこに生活する人々と一体のものとしてあるのだ。私は，図書館が地域住民の生活や生存を支えて存在する実態を見てきた。公共図書館の存在意義はそこにある」（p.144）と記すとともに，「市町立図書館は県民サービスの最前線，県立図書館長もそこに学ぼう」（p.100）と記している。

さらに，「憲法が保障する『基本的人権』は図書館と不可分の関係にあることは自明だ」（p.57）と，図書館の本質をきちんと捉えており，高校社会科教諭としての経験が生かされている。そして，子どもの読書の重要性に着眼し，「県立図書館は県内の図書館と連携して，子どもたちを含めた人間の自由や人権を守る砦として，平和に暮らすための大事な施設であることを深く認識することとなった」（p.78）と記し，人の成長を育む図書館の可能性をしっかりと生かしている。県教育長として学力の課題に取り組み，「読書を通した読み・書きの力，読解力の育成などは多くの支持を得た」（p.86）とし，「読書は，子どもたちの成長を支える必須の刺激と栄養だ。確かな学力には読書は不可欠である」（同）としている。そこで，「読書県しずおか」の構想を推進し，朝読書を広め，県読み聞かせネットワークを立ち上げ，読み聞かせボランティアを支える「読書アドバイザー」の制度を定着させた。毎年度フォーラムが開催されており，地域における子どもの読書活動へのさらなる推進の取り組みが続いている。

このほか，「図書館とは人なり」とし，「第一に，図書館職員の如何により図書館効果は大きく動く。特に，司書の力量，センス，接遇などによりサービスのレベルは大きく変わってしまう。資料に対する深い理解，相談に応ずる対応力，住民や地域に対する観察眼，生活者の視点，人権への配慮など司書の資質にとって大事な要素だ」（p.145）とし，「学び続ける人こそが専門職に値するし，図書館とはそういう職員により支えられる」（同）として，司書の重要性や育成についても記している。また，図書館に関心を持つ私たちは，この本で珠玉の言葉にさりげなく出会い，前向きな気持ちになれる。「図書館や読書が，『自由』や『人権』や『民主主義』の保障と深く結びつくことからも，『誰一人取り残さない』SDGsの理念，項目と重なることは明らかだ。自由で多様な，そして，平等で豊かな社会の実現は図書館の未来にとっての大切な要素といえる。図書館は持続可能だ」（p.143）と記している。こんな館長と一緒に仕事したいな！と思った。

（大石（おおいし）　豊（ゆたか）：千葉県立東部図書館）

会員募集のご案内ー会員の皆さまへ

日本図書館協会（JLA）では正会員，準会員，賛助会員を募集しております。

本法人は，全国の図書館の発展，文化の進展を図る事業を行うことにより，人々の読書や情報資料の利用を支援し，もって文化，学術，科学の振興に寄与することを目的としています（定款第３条）。

これからの日本の図書館界に清新な活力を注いでくださる皆さまのご参加を求めています。会員の皆さまにおいては積極的な勧誘をよろしくお願い申し上げます。

詳細については本法人ホームページ「入会のご案内」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/membership_information/

日本図書館協会の活動を豊かなものにするために

ご寄附のお願い

本法人は，全国の図書館の進歩・発展を図るため，図書館運営の支援および政策提言，図書館職員の育成並びに研修・講習や図書館運営に関する調査・研究・資料収集，機関誌等の刊行など，図書館活動を通じたさまざまな事業を展開しています。

こうした公益目的にかなう事業のさらなる充実を図り，21世紀のよりよい文化的社会を築いていくため，広く市民や会員の皆さまからのご寄附を受け付けております。

なお，本法人への寄附金には特定公益法人としての税制上の優遇措置が適用され，所得税・法人税の控除が受けられます。

詳細については本法人ホームページ「ご寄附のお願い」をご覧ください。

https://www.jla.or.jp/request_for_donations/

charibon（チャリボン）by VB

あなたの本のご寄附が全国の図書館を支えます。

皆様の読み終えた本が図書館をサポートする活動に役立ちます。ご提供いただいた書籍、CD、DVD等を提携会社が買い取り、代金が日本図書館協会への寄附金となります。段ボールに詰めてご連絡ください。5冊（点）以上なら送料はかかりません。

古本を寄附 **書籍類を梱包** › 集 荷 **配送会社** › 仕分け・査定 **VALUE BOOKS** › ファンドレイジング **日本図書館協会**

5冊から送料無料　　買取相当額の寄附

https://www.charibon.jp/partner/jla/　TEL：0120-826-295（バリューブックス）

季刊『現代の図書館』刊行のご案内

＊現代の図書館編集委員会編　B 5 判・平均 52 ページ・定価：1,430 円（税込）

・Vol.62 No.1（2024年 3 月刊行）

特集：デジタル田園都市国家構想と図書館

田園都市と図書館－これからのデジタル化の流れの中で……西村幸夫
明治・大正期の「田園都市」のなかの図書館……杉山里枝
「スマート図書館」の実現を目指して－デジタル田園都市国家構想交付金で実現したこと……深田正範
デジタル田園都市国家構想交付金デジタル実装タイプ　マイナンバーカードを利用した電子図書館サービス……矢島征幸
「チームとしての学校」に公立図書館が加わること－企画・予算から運営まで……桃原勇二，岡田優子

投稿

NCR2018は司書課程でどのくらい教えられているのか……木村麻衣子，宮田洋輔，金井喜一郎，橋詰秋子

・Vol.62 No.2（2024年 6 月刊行）

特集：LGBTQ への情報提供サービス

レズビアンのコミュニティ資料とアーカイビング－日本の現状と課題……杉浦郁子
トランスの人々の交差的な経験のアーカイブ化に向けて……武内今日子
「LGBTQ コミュニティ・アーカイブ」構築に向けて－プライドハウス東京「文化・歴史・アーカイブ」チームの取り組み……山縣真矢
ホモサウルス Homosaurus の使命と歴史，現在の多言語化プロジェクト……K. J. ローソン，訳：須永和之
学校図書館職員雇用状況調査（自治体）……日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会
学校図書館職員雇用状況調査（自治体向け）報告……日本図書館協会非正規雇用職員に関する委員会

・Vol.62 No.3（2024年 9 月刊行）

特集：平安時代の文学作品と図書館

相愛大学図書館「春曙文庫」の蔵書とその最新研究……阿尾あすか
春曙庵主田中重太郎－その人となりと蔵書形成……山本和明
天理図書館と『源氏物語』古典籍資料－蒐集の経緯・名品の紹介……岡嶌偉久子
日本古典文学作品と AI・機械翻訳について……淺川槙子
デジタル言語資源－『日本語歴史コーパス』の活用……須永哲矢

投稿

高等学校におけるラーニング・コモンズの現状と課題－先行的に取り組みが進んでいる高等学校を対象とした調査から……須藤崇夫，野口武悟

・Vol.62 No.4（2024年12月刊行）

特集：タイアップする図書館

読書とスポーツの異業種連携協力モデル－台湾の国立公共資訊図書館「読書ホームランプログラム」を事例として……洪　敦明
図書館からスタジアムへ，スタジアムから図書館へ　サッカーJリーグチームとのタイアップ事例……小池信彦，松永憲明，澤谷晃子，天野奈緒也
北海道日本ハムファイターズと北海道内図書館およびスポンサー企業とのタイアップ事例……荒木龍史
島根県立図書館におけるタイアップ事業について……大野　浩
熊本県の文化の礎として－県内文化施設とのタイアップについて……山形あき子，青木道子

投稿

国立国会図書館におけるマイクロフィルム長期保存対策……吉井伶奈
日本統治時代台湾における官立図書館の歴史的意義に関する一考察……井上敏孝

・Vol.63 No.1（2025年３月刊行）

特集：図書館による出版活動

紀要は郷土愛のために－『南葵音楽文庫紀要』の使命……美山良夫
『大阪府立図書館紀要』の発行について……大阪府立図書館紀要編集委員会
『早稲田大学図書館紀要』の来歴と意義－図書館職員に身近な研究成果発表の場として……稲葉直也
明治大学図書館紀要『図書の譜』の刊行について……折戸晶子
分配者から協働生産者へ－新たな知識のエコノミーに向けた機関リポジトリOUKAの実験……神崎隼人，甲斐尚人
自主学習グループによるオープン化活動－「ししょまろはん」の活動内容と情報発信……きたむらきよこ
公立図書館が刊行する紀要類の現況……南波佐間望

・Vol.63 No.2（2025年６月刊行）

特集：災害を記憶する－阪神・淡路大震災から30年

大規模自然災害の記憶の継承と地域歴史遺産の役割－阪神・淡路大震災後30年間の歴史資料ネットワークの活動から考える……奥村　弘
傷跡が歴史の歩みを呼び覚ます。－まちの歴史は30年でバトンタッチ……金　千秋
災害時における女性の人権－女性の視点から災害を検証する……正井禮子
記録を残すこと，集めること，整理すること－神戸大学震災文庫の活動を手がかりに……中山貴弘
1995年生まれ「震災を知らない世代」が阪神・淡路大震災を伝える－公共メディアが担う新たな役割と可能性……斉藤佳澄

事務局カレンダー

＊○印の日が事務局のお休みです。

■2026年１月

日	月	火	水	木	金	土
＊	＊	＊	＊	①	②	③
④	5	6	7	8	9	⑩
⑪	⑫	13	14	15	16	⑰
⑱	19	20	21	22	23	㉔
㉕	26	27	28	29	30	㉛

■2026年２月

日	月	火	水	木	金	土
①	2	3	4	5	6	⑦
⑧	9	10	⑪	12	13	⑭
⑮	16	17	18	19	20	㉑
㉒	㉓	24	25	26	27	㉘
＊	＊	＊	＊	＊	＊	＊

図書館雑誌／２月号予告（Vol.120 No.2）　定価1026円　２月20日発行予定

特集：トピックスで追う図書館とその周辺　予定内容＝県立中央図書館司書育成方針－理想の司書を目指して（殿岡容子），山形県新庄・最上地区の「地域まるごと学び場プラン」について（一般社団法人とらいあ），20年間のLibrary of the Yearと今後の展望（岡野裕行），「本de恋活」でPR－20代から40代の人への来館を促す取り組み（一ノ瀬留美），新しい読書体験を通じた若者支援施策のPR（山本啓太），図書館が劇場に！－中学生が本の魅力を劇で伝えるビブリオドラマ（サイトウトシオ），政令指定都市立図書館サミット開催（大井亜紀）。以上のほか，**〈小規模図書館奮戦記㉔晴嵐コミュニティ図書室〉**本と子どもとこのまちで－ボランティアでつなぐ，まちの図書室50年（谷かをり），**〈図書館で実践！SDGs⑭さいたま市立大宮図書館〉**「にぎわいからハタラキを起こす」－地域活動の拠点のひとつとして多世代が交流できる図書館に（篠原由香），**〈れふぁれんす三題噺㉗小牧市中央図書館〉**キラリと光るレファレンス（花里千賀子）等の連載記事ほかを掲載してお届けします。

編集手帳

◆新たな年が始まりました。2026年，21世紀最初の四半世紀が終わり，新たな四半世紀の始まりでもあります。新しいことにチャレンジするにはいいタイミングかと思います。また，令和８年でもあり，末広がりの「八」，８を横にすれば∞（無限大）にも見えます。図書館の無限の可能性を信じ，新たな挑戦に取り組む読者の皆さんに良いことがありますように。（委員長・松本哲郎）

◆今日，多様な人びとの図書館利用を支援し，読書環境を整備するための検討や取り組みが求められています。文部科学省の「図書館・学校図書館の運営の充実に関する有識者会議」でも論点の一つになっています。有識者会議での議論の成果が，図書館に関わる制度や基準の見直しへとつながり，より一層，多くの人びとに開かれた図書館となることが期待されます。（青柳英治）

◆昨年，相模原市内のフェスに参加しました。知らないバンドばかりでしたが，「知らないからこそ面白いかもしれない」と楽しんだことで，新しい世界が広がりました。本も同じで，どんな作品と出会うかは環境づくりに左右されます。思いがけない一冊との出会いが，日々の景色をそっと変えてくれるように，工夫する悩ましさと喜びを，今年も味わっていきたいと思います。（岩永知子）

◆業務で生成AIをはじめとした新技術活用の可能性を検討したり，海外出張したり，私事で書き物をしたりと，変わったことが色々とあった１年でした。その中で変わらぬ忙しさの弊誌編集作業は安らぎのひととき……とは言えませんが，前進しているのは自分・自館だけではないと知ることができたのはよかったかもしれません。本年もよろしくお願いします。（宇野亮一）

◆定年退職の後，図書館情報学関係の講師として教えています。大学の図書館に学生アルバイトとして働いていた時代を含めると，大学図書館に関わって，ほぼ半世紀が，あっという間に過ぎてしまいました。

大学という高等教育機関を取り巻く環境は大きく変化したけれども，専門職としての司書がもつ可能性は信じたいと思います。（中村保彦）

◆「現代図書館建築の殿堂」日野市立中央図書館が文化庁の有形文化財に登録されたのこと。半世紀前，建築にあたり設計者鬼頭梓氏と初代前川館長との議論で示されたコンセプトの一つが「歳月を経るほど美しくなる。」図書館の本質そのものとも重なるこの言葉が具現化され今なお現役の建物に，新しい年を迎えますます錆び行く自分を戒めたい2026年です。（長谷川優子）

◆資料紹介の記事作成で，ある人物が書き残した日記を翻刻しました。解読は大変でしたが，日記の記述から歴史的事象を垣間見る楽しさがありました。現代では人々がSNSで意見を発信していますが，それらの多くはタイムラインの彼方へ消え，記録されることは稀です。将来の歴史研究者は，どのように「今の時代」の市井の人々の声を拾い上げるのだろうかと，ふと考えさせられました。（宮原柔太郎）

◆近年，図書館と近隣施設や書店などとの連携が今まで以上に注目されています。勤務館でも市内の書店と連携を始め書店員の方と話す機会や書店に足を運ぶことが増えました。書店に行くと本が好き，読んでもらいたいという思いが伝わってきます。ですが，今や電車の中で本を開いている人は，少数派。だからこそ図書館と書店のお互いの強みを活かした協力が必要なのだと感じます。（米山　薫）

◆日本図書館協会を訪問されたことはありますか？私はというと…，毎月の図書館雑誌編集委員会はweb参加。協会初訪問は昨年の児童図書館員養成専門講座受講で実現しました。茅場町駅近くの宿泊先から10日ほど通い，３階の図書館や，研修後に語らう場となる角打ちの魅力を知った頃には講座修了となり…。協会近所の「越前堀児童公園」にも福井っ子としてはご縁を感じました。（鷲山香織）

……編集スタッフより……

◆1995年のWindows95の登場から30年。インターネットと自宅でのPC利用がそのころから一般化してきたと記憶しています。その後，2000年前後にはEメールやSNSなどのデジタルツールが急速に広まり，社会の変化は加速していきました。特に近年はAIの進化が著しく，素人考えながら，IT革命と言われたころの比でないスピードで，生活や仕事のあり方を変えていくのではないかと感じています。（秦　秀文）

◆『図書館雑誌』は1907（明治40）年に創刊され，今年で第120巻目を迎えることとなりました。長きにわたってご支援をいただきました読者の皆様，関係者の皆様に心より感謝申し上げます。これまでの歩みをあらためて振り返りながら，現状を見据え，未来へとつながる記事やニュースをお届けしてまいります。今後とも，どうぞよろしくお願い申し上げます。（星川智隆）

◆日本図書館協会事務局園芸部（３名＋顧問），活動中です。先日剪定作業中に，通りすがりの方に「いつもお花拝見しています」と声をかけていただき，はりきっています。

（川下美佐子）